
真・恋姫十無双～劉表伝～

言霊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫十無双〜劉表伝〜

【コード】

N0833R

【作者名】

言霊

【あらすじ】

「銅臭政治」と呼ばれる、賄賂がまかり通る悪政。売官により官職を得た者による苛斂誅求により民力は疲弊し、同時に治安の悪化を惹起し後漢は衰退していく。そんな中、一人の転生者が外史に現れた。

転生先は優柔不断で周囲の変動に対応できる力がないと言われた劉表。彼は激動の中をどう生き抜いていくのだろうか？

*三国志の正史の話題が出ますが、個人サイト、解説本などからま

とめていきますので間違っている部分も多々あると思います。しし注意を。

プロローグ（前書き）

文才に乏しく見苦しい部分が多々あると思いますが、どうかお付き合いただければと 思っています。

プロローグ

「劉表よ、荊州の民は頼りにする者も無く、怨嗟の聲が野に満ち満ちている。直ちに荊州へ向かい区星を討伐、法を施し万民を導け。」

・・・はあ？

マジで勘弁してくれ、何でこんなことになってんだよ。

こんなときは素数を数えればいいはずだ 1・・・いや、こういうときは素数じゃなくて自分の生い立ちを見つめなおして冷静になろう

目覚めたらいきなり恋姫の世界に来ていた。なんて言うありきたりな感じで平凡な大学生からいきなり劉表になってました。

神様に会ってチート能力とかもらってないし、恋姫のヒロインたちと兄弟とか幼馴染なんて事もなく、一刀君のように天の御遣いなんて言われもしない、しかも恋姫では名前どころかいない事にされてる奴に転生とか・・・

正史の方で三国時代の英雄達からの評価が最悪と言っている劉表。

木偶の坊、才能ない、心狭い、生まれる時代間違えた奴 e t c・・・誰か褒めろよ。

まあ、この世界の一騎当千どころか一騎当万しそうな化物達に関らないで、平和そうなところに逃げよう。俺の武力なんてゴミみたいなもんだし、清廉潔白で完璧超人な劉虞がいるのに俺を皇帝にしようなんて奴なんているわけがないしやりたくもない。

見聞を広げる為とか言っただけでふらふらしてるか、領地経営やってればいいや

そうすればどっかのポリエステルがヒロインとエロい事やりながら、
頑張っ て平和にするだろ。

なんて気楽に過ごしてきたらいきなり皇帝からの命令で荊州に行け
ときたもんだ。

聞くところによると長沙の大守を区星が殺したらしくそのことで調
子に乗ったのか始皇帝を名乗って荊州南部で好き勝手やってるらし
いから俺にどうにかしろと言ってるということらしい。

「てめえが売官なんかしてるからそうなったんだろっが！」

と突っ込みたいがそれをすると不敬罪で殺されそうだ。

断るわけにもいかず泣く泣く荊州へ向かう事になった。

「どっつすればいいんだよ。」

第1話 現実

兗州の山陽郡で前漢・景帝の子「餘」の末裔とされる皇族として生まれた。

姓が劉、名を表、字が景升、真名を陽

初めは混乱したが自分がどれだけ恵まれている環境にいるのか理解した。

皇族という地位、数えきれないほどの書物、そしてお金。

二度目の人生を劉表として頑張つて生きていこうそう心に決めた

2歳で走り回り、3歳で大人のように話す。そして5歳で兵法、算術、農政、地理等を学び、

九章算術では取り崩し法を用いて、近似値として3.14を円周率とするのがよいという注釈を出す。そんな事をしているうちに天上の石麒麟なんて呼ばれるようになるまでなった。

実際子供になってみてわかるが、前世の受験勉強で苦労していた自分が哀れになるくらい幼児の能力は高い。

子供は無限の可能性をもっている。

前世では信じていなかったが、今なら信じられる。

実際に学んだ分だけ確実に成長できるとするのは実に楽しい。

ゲームやってた頃は孫子や九章算術とか言われてもよくわからずに孔明すげーとしか思ってたことも今なら理解できる。

そんな子どもを持つ能力に夢中になり調子に乗って転生者の特権いかしてバリバリ活躍してやる。
なんて事を思っていた自分を今では殴りたくなる。

そしていざ政治の世界に足を踏み入れた時現実には甘くない事を思い知った・・・

経済が崩壊寸前なのだ

立て直すなんて無理！というか閉ってたらこっちが悪人にされて処刑される！！！！

何でこんなことになっているのかと言えば我らが敬愛する皇帝劉宏様が売官しているのである

四百石の官は四百万銭、九卿は五百万銭、三公なら一千万銭、大守は二千万銭を基準とした売官をしていた。さらに身分の低いものは割り増し料金を加算できるという皇帝は座っているだけで大金が入るといふ笑いが止まらない商売をしていた。

そしてその官位を買った者たちが任地において重税を課す。

たとえば大守の座は最低でも二千万。ただ大守の仕事をしているだけでは赤字になるので、それ以上のお金を従来税に加えて徴収する。

そして貴族豪族勢力は儲かったお金を持って自分の領地に引っ込む

その理由は簡単だ。

二千万銭、円に直すと二十億以上の金をむしり取っているのだ
恨まれないわけがない。

そして暴動が起きる前に逃げる。

ただそれだけの話である

問題はその儲けたお金を貯め込んで出さないことだ。

そんなことをしていれば銭の価値が暴騰

そして銭の価値が暴騰している中、無理やり苦勞して米を売って銭納している。

一定の税収はデフレで銭の価値が上がっているから、それは増税と等しい。

役人を切ったり、税を下げれば解決するとかいうレベルの問題ではない。

その上貴族や豪族は、お金は貯め込んでできるだけ銭を使わない生活をめざし自給自足をはじめめる。物物交換どころか自給自足して物すら出回らなくなる

「恋姫キャラはどんだけチートなんだ・・・」

思わずため息が漏れる。

こんな状態で善政を行う？

そんなこと自分にはできる気がしない。

仕事をすれば腐敗官僚になる。

そんな状態でもとはただの大学生である自分が何ができるんだ？

そついうのはできる奴らに任せよう。

そんな事を考えながら自分の領地に引き籠っていた。

第2話 荘園

この時代、豪族の土地でとれた作物は基本的には徴税の対象外となる。

これはこの時代の豪族の強さを示していると同時に漢王朝の弱さも示しているといっている。

三国時代に人口が10分の1にまで減少したという。これは流民が戦乱を避けて流浪中に豪族の私民になり戸籍を外れたという意見が多い。

晋の統一直後の交州で「賓属せざるものは5万余戸。官役に服従するものはわずかに5千余家」

というような記述が普書に見られることからいかに戸籍に載らない人が多かったかがわかる。

何が言いたいのかと言うと、つまり豪族は結構好き勝手できたという事で

自分の土地で国に税金なんか払わずに小作人使って米や麦なんかを作っていた。

荘園である。

大体の荘園は農具や家畜などのレンタル、たとえば鉄製の鋤や鍬、牛などを貸し出している。

漢は鉄の専売制をしているから鉄製品の価格には国に収める税金が上乗せされていて農民には購入が難しいものだからこれだけでも人が集まる。さらにこの足踏み回転式脱穀機が完成すれば・・・

「なに、一人でぶつくさ言ってるんですか気持ち悪いですよ。また変なもの作って」

出やがった。家業を放り出し、財産をなげうつてまで困っている人を助けた。そして自分が貧乏になってたというなんともまあ大物ととっていいのか判断に困る奴だ

姓が魯、名を肅、字が子敬、真名を菖蒲。黒髪で利発そうなお嬢様みたいな感じがする容姿をしている

魯家に気遣いの娘が生まれたとかいう話を聞いて三国志ファンとしては会ってみたくなくて手紙を出したら、いつの間にか家に来て住み着いてた。しかも母親と一緒に・・・

母親の方は領地の子供の先生をしてきているからありがたい。しかし、いつも何をしているのか？ふらつとどっかにでていったと思ったらしばらく帰ってこないし、時々人を拾ってくることもある。だがとてつもなく優秀。政治能力が高いし、指揮もできる。忙しいときは手伝ってくれるし・・・

「変なものとか言うなよ。これを発明したことで俺の名が歴史に残るかもしれないほどのなんだぞ。」

「はいはい。で、それなんなんですか？」

「これは脱穀機っていったな、踏板を踏むとき胴が自動的に連続回転するように・・・って聞けよ。」

また始まったよ、みたいな目で見るな。ああだれかこれの大変さを分かってくれる人はあらわれるのだから。大変だったんだぞこれを作るのに何カ月かかった事か！

「だって長いんですもん。つまり脱穀する道具でしょ。」

「で、お前は何しに来たんだよ……」

「あー、忘れてました。また東郡から逃げてきた人たちがいるんですよ。」

いやだねえ、さっさと曹操が州牧にならないものか。まあそのおかげで人手には困らないって意味ではありがたいんだが、やはりいい気分はしないな

「まあ、輪裁式農業とか試してみたかったしその為の畑を……うん。」

二毛作は連作障害が心配だし、土壌診断なんて俺にはできないからな。あと……

「ちょっと自分の世界にはいていかないでくださいって！あと話し合いの時に使う麦酒なんですけどあんな値段で本当に売れるんですか？ちよつとというか、高すぎなんですけど……。」

「ああ、もし売れないようであれば値を下げて再交渉つてとこだな。まあ、酒はおまけみたいなもんだ、売れたらいいくらい気持ちでいいだろ。こつちが敵になりたくないってことを示せばいい。」

「うっ、私あの人たち苦手なんですよ。」

「……絶対に欠けてるとかいうなよ死ぬからな。」

あいつらは欠けてるってことにやたらとコンプレックスを持って
からな。

言ったら命がないのが常識ってどんだけなんだよ

「わかってますよ。」

第3話 宦官

菅蒲 side

私は今、陽様と宦官の張讓の屋敷にいる。

私は宦官が嫌いだ。陽様の前では苦手という言い方をしたが存在しているというだけで吐き気がするくらいに嫌いだ。

諸悪の根源が宦官の専横に在る事は、誰の眼にもわかる。

宦官のせいで自営の農地を奪われて、流浪する多くの民を見てきた。なぜ宦官などに会わねばならないのだろうか？

陽様は九章算術の注釈や短い間ではあったが洛陽の令として采配を振るい名声は高い。

宦官とつながりがあるという事でその名声が地に落ちる可能性もある。

現在、皇帝が幼いために皇帝の代わりに勅命を下すのは、摂政たる竇皇太后であり清流派の竇武の娘なのだ。内部でもめていているせいなのかまだ動いていないが、勅命が下ればこれまでのように宦官の好き勝手などではしなはず。なぜこの時期に宦官に接触する必要があるのか。

敵ではないと示す・・・それは宦官が清流派に勝つことを確信しているから？

だとしたらその根拠は？

分からないことだらけだ

そんなこと考えているうちに張讓が来た。

「これはこれは劉表殿、よくいらっしやいました。ご高名はかねがね承っておりますよ。」

豚みたいに肥えた奴だ。これからも民を搾取し肥えていくのだろう

「お忙しいところ申し訳ありません張讓殿。こちらは私の補佐を押しつけている魯肅です。」

うわ、考え事してるのに話ふらないで！

「ろ、魯肅です。宜しくお願いします。」

「ははは、かわいらしいお嬢さんだ。劉表殿は才だけでなく部下にも恵まれているようだ。」

かわいいで恵まれているって・・・どういう意味だ豚野郎。

こいつ宦官のくせに女好きだってうわさを聞いたせいなのか
そういう関係だって思われているとしか思えない。

「私にはもつたない程ですよ。」

「珍しい酒が入ったのでぜひ張讓殿に味わっていただきたいと思ひまして。麦酒といます揚州の方でも呑まれているものなのですが、そこに手を加えたものがこれだそうです。葡萄酒とはまた違った味わいが楽しめますので酒 徒と知られる張讓殿にと」

手に入ったって・・・自分で作ったくせに

「おお、麦酒ですか。色が変わっていて、泡もたっているのが気づきませんでしたよ。葡萄酒を引き合いに出されるとはよほど自信がある見える。どれいただきましょう。」

こいつの酒好きは有名だ。葡萄酒を寄越した相手を州の刺史したという話は始めて聞いたときは冗談だと思ったがこの様子からみてそんな事やりそうに見える。

「おお、うまい。葡萄酒を飲んで以来普通の酒では満足できなくなっていたのですが、これは・・・」

「お気に召されたようで幸いです。」

2人は雑談を始めていた。

政治の話などない、ただのおしゃべりだ。

「張讓様、そろそろお時間です。」

侍女の人だろうか。

「ではお互い忙しい身、そろそろここに来られた本当のわけをお聞かせください。ただ酒を紹介するためだけにここに来たわけではないでしょう?」

「そう言っていたけると助かります。」

では、と前置きを置いて話し始めた。

「陛下にこの酒を張讓殿から紹介していただけないかとおもいました、私が陛下の臣であることをご理解いたいのですが私は私事で職を離れ、申し訳が立たないのです。」

帝に自分が上に立つ気はないってことを張讓を介して言うつもりな

のか。

しかも臣であることを強調して・・・

「私からですか？」

「ええ」

「・・・いいでしょう。」

「感謝します。」

「ではこれにて」

陽side

つかれたー

もうこんな事はなにしてほしい

すっかり忘れてたが劉表は党錮の禁で逃亡生活する羽目になるんだ
った。

竇皇太后を使ったクーデターは失敗するだろうからここで手を打た
ないと最悪死ぬ。

彼女を含め後宮にいる人たちにとっては政治の主権争いなんかより
身の廻りの世話を見てくれる宦官がいなくなる事の方がよっぽど大
事なのだ。それに玉璽は竇皇太后が保管するものなのだが実際は担
当の宦官が持っているから詔勅を作ろうとすればばれるだろう。な
によりも宦官は皇帝自身を動かす事が出来るのだ。だがその時の俺
の立場はどうなるのかといえればかなり怪しい。皇帝は自分以上に資

格の有る皇族達が他にも何人も居る事が分かるくらいに賢い。ならばそういった者たちもついでに殺してしまおうなんて考えられたら終わりだ。ただ領地に引き籠っているだけの奴なら問題なかったが調子に乗って九章算術の注釈なんてやってしまったせいで余計な名声まである。

政治を統すべる宰官の次にえらいのが皇帝の飯を管理する人なんてふざけてるとしか思えないのだが事実なのだから笑えない。そんな皇帝に逆らう気がない事を示すのには金や言葉を尽くすよりうまいもんでもあげた方がいいだろう。

一番の問題は宦官だ。あいつらは異様な団結力を持っていて一致結束して立ち向かおうとする種の本能
みたいなもんがある。絶対に敵に回したくはない。

だったら酒でもあげて機嫌をとってればいい、あいつらの金銭感覚は狂っていて民間の値段の数百倍が普通だからいい商売になるだろう。この時代の酒のアルコール度数は1%に満たないようなものばかりだから加糖して度数をあげた麦酒はうまいだろう。日本だったら酒税法違反だがこの国にそんなもの存在しないから気にしないようにしよう。

さーて、帰ったら寝よう

麦酒とかの値段交渉とかは全部菖蒲に任せればいいや
たまには働かせないと俺の身が持たない

数日後 第2次党錮の禁と呼ばれることになる事件が起きた。

清流派100名以上が逮捕・処刑され、その力を失った

第3話 宦官（後書き）

ひたすら自己保身に走る主人公・・・魅力あるのか？

第4話 大守（前書き）

どうにも菅蒲がぶれてしまっていたので2話、3話を修正すること
にしました。

駄目な作者ですが見捨てないで頂けると嬉しいですm┐┌m

第4話 大守

陽side

「すみません、もう一度言ってくれませんか？」

ちよつと待て。いきなりすぎだろ。

「劉表殿を東郡大守とするとの事です。」

おい、俺はただ引き籠つただけだぞ。いろいろとすつとばして大守になんだよ。せめて県令とかにしてくれよ。それもいやだけどさ
「陽様、あれじゃないですか。党錮の禁で人切つたはいいけど代わりの人が見つからないとか？」

おい、菖蒲。なんでそんなに他人事のように能天気になんか。

「・・・それはないだろ。東郡っていったら人口六十万を超えるでかいとこだ。やりたい奴なんてくさるほどいるだろ。」

「じゃあ、麦酒くれたお礼とか？」

・・・まさか

え、まじで

嘘だろ

そんな事で大守とかじゃないだろうな

どんだけ適当なんだ

「ではこれにて失礼します。」

茫然としていたら使者の人からなんか紙渡された。
そして逃げられた。

「これ確定事項？拒否権は？」

「あるわけないじゃないですか。」

終わった。

俺の引き籠り生活。

「東郡か」。知り合いあんまりいないんだけど大丈夫かな？」

大守っていつでも周りの豪族や貴族の協力なしにいい統治なんてできるわけがない。

なんとかかしようにもまずは金が必要になる。いきなり金くれなんて言った所で貰えるわけがない。

しかも東郡は結構やばい奴が大守やってたらしく俺の所に逃げてきている人も・・・

あれ、もしかして結構やばい状態？

というか黒山賊に襲われるところじゃないか？

協力が得られないとやばい気がする。

「大丈夫だと思いますよ。」

「え？」

「私の知り合いがいますし、逃げてきた人からどういった状況なのかも聞いてあります。」

「おそらく豪族や貴族の方々も協力してくださるでしょう。」

「おお、菖蒲がとても頼もしく見える。なんだやばい状態だと思っただけで意外と大丈夫なのか」

「それにしても周りが協力してくれる状態ってどういうことだ？」

「そんなに民を憂いている豪族や貴族がいっぱいなのか？だったら俺の領地に逃げてくる人なんていないと思うんだが……」

「はい、賊が暴れていて治安が悪くなっているので、周りに領地をもつ方々も迷惑していらっしやるようなので援助もしてくださいさと思えますよ。」

「……つまり賊がいると迷惑だからさっさと鎮圧しろ金はいくらか援助してやるからみたいな状態？」

「そんな感じですね。そういったお金を出し渋るほど愚かではないようですし、こちらとしてはありがたいのですがいきなり賊討伐からしらないとならないのはちょっと辛いですね。」

「俺の私兵はあんまり多くないぞ。現地で調達するしかないか。はあ」

おもわずため息が漏れる。

それにしても東郡に知り合いなんていつ作ったんだ？

兎州に来て2年くらいしか経ってないだろう。

まあ、聞けばわかるか

「なあ、知り合いなんていつ作ったんだ？」

「ふふふ。私もただ居候しているだけでは心苦しいので驚くくらいの人脈を作っただけよ。陽様そいうこと本当に雑すぎるのでいろいろと頑張ったんですよ。」

「え、そんなことしてたのか？ だったら言ってくればお金とか用意したし、仕事押しつけなかったのに」

「お金なら十分貰ってますし、そんなことしてらって知ってたら本当に辛いときでも無理をして私に頼ろうとせずに一人でやろうとするでしょう？ そんなことしてたらいつか死んじゃいますよ。人に頼る事も覚えたほうがいいです。」

俺どれだけダメ人間なんだよ。というか気を使わせてたのか。

「菅蒲、ご、ご、どうです？ あまりに健気な私に惚れてしまいましたか？」

「……はあ、謝るな。これからの態度で示せてことか。ほんと駄目だな俺」

「ああ、惚れた惚れた。」

「言い方が気に入りませんがいいでしょう。では準備して行きましょ
うか」

第5話 討伐

陽side

「支援ありがとうございます。」

「いやいやこちらも治安が乱れることは望んでいませんので・・・」

・・・

「高名な劉表殿にこうして」ry

・・・

「一度お会いになりた」ry

・・・

「これで終わり？」

もう限界・ストレスで駄目かもしれない。なんであんなに話が長いんだ。お前らの家の事なんて知らねえよ。もう死ぬ。討伐に行く前に死ぬ。

「ええ、お疲れ様です。では白馬の方に賊がいるそうですから行きましょうか。」

「・・・1日くらい休まない？」

ちよつと精神的に限界なんだけど、俺は死ぬ確率高いからストレスが半端ない……

くそ、頭の方は政治力が三国志でも5指に入るほどの人物だけあって補正つぽいのがあったけど武力面のひどさが半端なかった。さすがは某三国志のゲームで孔明にも劣る武力の劉表。一般兵ほど酷くはないが武将クラスになるともうだめ、1撃で死ぬ。こういうとき転生者は普通努力で強くなるとか気で強化とかやるんだろうけど・無理。俺が鍛えたところでたかが知れてるし、だったら指揮とか政治について勉強した方がいい。俺が使っているのは自作の化合弓（滑車がついた弓でランボーが使ってたやつ。引く力が従来のものより半分で済む優れもの）持っている剣や槍はお飾りである。非力さを道具でカバーすればいいやという考えで……どこか努力の方向を間違えたような気がする。

「だめです。新任の太守が率先して賊討伐に力を入れている事を示さなくては形だけ討伐しているものと思われるかもしれません。後で苦労することになりますよ。」

そつなつちやうよな。前の奴がそうだったみたいだし

「義勇兵をこれ以上増やしてもしょうがないし、行くか？」

「じゃあ準備させますね。」

「お頭！商団を発見しました！！」

「何、本当か？」

「ええ、護衛も付いているようですが十数人ほどです。」

「こんなところで出くわしちまうなんて運がねえ奴らだ」

「野郎ども出陣だ！！！！」

「おおーーーーーっ！！！！」

（街道）

商団は賊を見るなり荷駄を全て置き捨てて、一目散に逃げ出した。

目の前には大量の食糧と武器・弓矢などが残され、これを見ると賊は目の色を変えた。

突如、一応とは付くが統制のとれていた賊がごちゃごちゃに乱れ始めた。早い者勝ちの、略奪競争が始まったのである。

「賊の軍形が崩れた！弩隊構え！」

義勇兵を中心とした弩隊が構える。

「てーーーーー！！！！」

商団（囀）に群がっていた賊に向かって矢を射ている。

弩は連射性が悪いのだが隊を分けることで補う。信長の鉄砲三段撃ちのパクリである。

その後、騎兵隊突撃させる

「騎馬隊突撃！！雑魚には目をくれず将を狙え！将さえ討てば敵は総崩れだ！」

「「「「「おおーっ！！」」」」

余談だがこの騎兵隊は鎧も兜も脚半も槍の柄、刀の柄、鞘、鞍に至るまで、何もかも、真っ赤。

赤備えT u e e eをやりたいかつたどっかの馬鹿が大金をかけて作ったものである。

この赤備えによって兵の団結力が高まったのだから無駄ではなかったのだから隠れるのに苦労したらしい。

陽side

普通、あんなところに都合よく商団は来ないだろ。賊が単純だったから何とかなかった。

意外に相手の練度が高かったから正面から戦ったら結構な死者が出ただろうし、

賊に手こずる様だといつまでたつても内政に手がつけられなかったから早く片付けられて良かった。

第5話 討伐（後書き）

これ劉備と文醜が引つ掛かったらしい。

しかも曹操と戦争中に・・・大丈夫なのだろうか？

第6話 内政

内政に関り2年、不正していたものを財産没収の上で追放し、没収したお金や討伐の際の浮いたお金を使って道には警備の兵を巡回させ治安を保つようにしたり、農具の貸し出しを行ったりした。だが問題としてはデフレがどんどん進んでいく事である。本当であれば産業を起して発展させるのがいいのだろうがその為には莫大な資金が必要だ。気軽にやっていい事じゃない。自分の領地ではいろいろな事を試したが、ここで自分の安易な思いつきを試すべきではないだろうと堅実な統治を心掛けた。

東郡の人たちは良くなったというのがこれからどんどん銭の価値が上がっていくだろう。

そうなれば人頭税を払えない人が出てくるかもしれない。そんなことになればどんどん民が土地を捨てて他国や荘園豪族の元に逃げ込む。盗賊や災害なんかで流動する人口動静を把握しながら徴税する。言うは簡単、実際に行うのは難しいから人口台帳通りの徴税することになる。それだけの人口もいないのにもとの人口通りの徴税をする。そうなれば俺も悪代官の仲間入りだ。そうならない為にも他の豪族の荘園より良くしないとイケないのだが荘園よりもいい環境を整えるのは難しい。土木工事と治水事業をやれている荘園は少ないからこの2つの対応は念入りに行った。やっぱり引き籠って領地を経営していた方が俺は好きなんだよな。たしかにこういう仕事はやりがいがあるが60万の命がかかってるなんて重たすぎる。精神的につらい。

俺に出来るのは肥料の作り方と農具や牛を貸し出してとれる農作物を増やして税収が増えた分を収入を少しばかり増やして補わせるぐ

らしいかできない。あとは治安を良くしたくらいか？

まあ、黄巾まではのんびりできるかな。

「やっと一区切りつきましたね。」

菖蒲も2年経って大人っぽくなっていた。胸は・・・小さくても需要あるよとしか言いようがない。
言ったら殺されそうだが

「なにか失礼なこと考えませんでしたか？」

「カンガエテマセンヨ。」

「ならいいですけど。」

そんなやり取りをしていたら皇帝からの書簡が来た。
またこの流れかよ。いやな予感しかししない。

「劉表殿、至急洛陽に來られたしとの事です。」

なんだよ、早く来いって用件言えよ。

いやな予感しかししないんだがこれに逆らえるほど俺はえらくないし、行くしかないか。

というよりただの太守呼びつけんなよ。

もって偉い奴と話してればいいだろ。

第7話 霸王（前書き）

ようやく原作キャラが出せました！

第7話 霸王

「くっ、宦官の孫が」

「聞くと禁忌の子だそうだ！」

周りからそんな声が聞こえる

（噂でしか人を判断できぬ凡庸な者ども、もはや怒りではなく憐れみすら湧いてくる）

そう、悪態付く少女がいた

彼女は此の世に生れ落ちた瞬間から既に、中国の人々が最大の禁忌とする2つの社会規範を犯した存在であった

異姓のものを養子にできないこと、そして同じ一族の者との結婚をして子を設けたことの2つである。

彼女の祖父は宦官で子が生せない所以他家から養子とり、その養子の子が彼女の祖父の一族の者と結婚したのだ。彼女を見る目は冷たかった。

それでも腐らずに己を研磨し続け、名士への道を志し、中には自分の才を認めてくれた人もいた。

「乱世を治めるのは君だと」いつてくれた人もいた。

自分は濁流派ではない証明するために宦官の総帥である中常侍の張譲の私邸へ潜入したりもした。

しかし、認めてもらえない。名士としての能力は十二分にある。

だが世の名声を第一義とする名士社会には、彼女は禁忌。

月旦評をしてもらおうと名士認定の達人の許劭を訪ねたときも無視され続け、鎌で脅してようやく得た評価は「治世の能臣、乱世の奸雄」と散々なものだった。

しかし、評価は得られた。後は推薦されるだけなのだが孝廉への推薦状がない。

本当であれば許劭が出してくれるものなのだが、武器で脅した者を推薦などするわけがない。

(私が何をしたというの?・・・出自?家柄?それがなんだというのだ!才なきものが治める世に本当の平和など訪れるわけがない。才あるものが導いてこそ真の平和が訪れるのだ。私が栄達したのちには才あるものがその力を発揮できるような世を作って見せる!)

そんな覚悟を決めていた少女の近くに能天気な顔をした男がいた。

陽side

おおーすげー儲かったた。ビール最高!

2年間太守の仕事ばっかしてて忘れてたけどビールってこんなに儲かったんだ。桁が違ったよ

そういえばこの時代酒を飲める奴ほど尊敬されるんだった。

あれ、これって産業にできるんじゃないか?

宦官の奴らにだけじゃなく豪族達にも売ろうかなちよっと安い値段で、加糖の量を変えて値段に差をつければいいや。やべーー 帰ったら工場でも作るか?

ドスン!!!「痛!」「キャ!」

「わ、悪い。大丈夫か?」

下を見るとパンツまる出しの少女がいた。白だった。

「・・・」

「・・・」

みるみるうちに顔が真っ赤になっていく。間違っても照れているわけではなく

怒りで燃え上がっていて赤くなっていた。

あれ、いつの間にか鎌持ってる。

このままでは首を切られることは火を見るより明らかだ。

「ごめんなさい・・・では失礼！」

全力で逃げた。このとき俺は自分が狩られる立場の人間だと理解した。

そして傍目から見れば少女から必死に逃げてるあやしい人なのだが構わず逃げた。

そしてテンプレの行き止まり。

「追いつめたわよ。観念しなさい。」

「観念ってちよっとまった！」

なにこの子怖いんですけど・・・あれ、どっかで見た事ある様な気がする。

金髪ツインドリルに髑髏、それに鎌を持った貧乳娘・・・

あれ、曹操じゃねえ？

というか小さい、胸なんてまな板の様である。

11、2歳ってところか、もしかして俺って曹操より結構年上？

いせいせそんないとは今世でまうらうだわい。

どうすねばいいんだよ。

第7話 霸王（後書き）

口調がおかしいかもしれません。
後で修正するかも

第8話 打算

孝廉とは郡の太守による推薦制度で二十万につき一名の割合で採用するもの。官吏の養成学校とでもいうべき太学が党錮の禁で壊滅してしまったために、月旦評が微妙で宦官の孫と異端の子のネームバリューを持つ曹操が就職活動？を成功させるには太守に顔のきく者に推薦状を書いてもらうしかない。だが劉表は太守なのでそんなものなくてもすぐ孝廉に推挙してもらえるのだが・・・劉表が何者かなんて知らない曹操、頭を下げさせていた。

陽side

やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばい

あれ、俺死ぬんじゃないのか？

何でここで曹操が出るんだよ。登場早すぎだろ。

何か手があるはずだ。考えろ！考えろ！

ごちそうさまでした？・・・殺されそうだ

ありがとうございます？・・・なんかおかしいことになってるぞ。
落ち着け！

ここはとりあえずジャパニーズ土下座をして何とか許してもらわな

いと

曹操がぐれてた時期だとしたらやばい。不法侵入するは皇帝お気に入りの宦官の伯父を法の裁きたヒヤハーと殴り殺してる。そんなかわいそうな犠牲者になりたくねえよ。劉表伝々完々なんてシヤレになんねえぞ。これを

「大変申し訳ございませんでしたー！！！」

「別に怒ってないわよ。」

ちよっ、鎌が首にー、怒ってないなんて嘘だろ

「名前は？死ぬ前に名前くらい名乗りなさい。死体は家に送り届けてあげるから」

「劉表です！東群でしがたい太守やってます。許してください。」

「嘘をつきなさい！皇族の名を騙るとは死を覚悟して居るのでしょうね。なんだつたら今首を刎ねても……」

「懐に皇帝からの書簡がある。とりあえず見てくれ！」

「そこまで言うのであればいいけど、偽物だったり、なかったりすれば分かっているのでしょうか。」

「わかったわかった。早くしてくれ。首が痛い」

おお、なんか驚いてる。よかったこれで解放されるかな？いやダメかな

曹操 side

劉：表？

劉表といえば第二次党錮の禁で唯一と言っていい清流派の生き残り、八俊の一人とまで謳われておきながら生き延びた。

噂では宦官の弱みを握っており、皇帝からの寵愛も厚く手を出せなかつたと聞く。

しかし、それを嫌った宦官が地方へ追い出したはず

それがなぜこんなところに・・・

そしてなぜ私に頭を下げている。

皇族に頭を下げさせる。不敬罪に当たり死刑になってもおかしくない。

まさかそれを狙った。いや、ただの書生である私をはめて何の意味が・・・って

「顔を上げてください。知らぬことは言え皇族の方に頭を下げさせるとは…ご無礼をお許しくください。」

陽 side

あれ、なんで曹操が謝ってんだ？

北部尉とかの役職についてるなら俺もう死んでるよね。あれ、まだ司馬防に仕事紹介して貰ってないのか？これって恩売って将来名譽職もらえるチャンス？呉ルートで曹操日本行きだとしても問題ないなあその統治方法は豪族の力が異常に強くなるから、正史では呉という国名なのに呉郡を自分の物に出来ていないことから分かる。

そんな状態で改革なんてできないだろうし、あれ、内乱起きるんじゃないかと思っただが考えない事にしよう。ぶっちゃけ揚州とか訛り

ひどい上に流刑地で治安がよくないし、女裸相撲はものすごくみたいけど…益州はジメジメしてるし変な宗教流行ってるから魏に居たいな。

国名もカツコ悪いし呉は言葉が通じない野蛮人って意味だし、蜀なんて虫けらだもんもうちよつとカツコいい名前は考え付かなかったのかよ。いやそんな事はどうでもいいか。今は曹操に借りを売って、正史の司馬家ぐらい優遇してもらえるようにしておくべきだろう。恋姫は史実と違って南部に人口が大移動なんてしてないみたいだし、劉焉と劉表が華北の争いの時居なかったから善政してる奴がいない南に移動する奴なんて少ないだろう。人口なんて呉の揚州・交州・荊南合わせても800万+、蜀が益州だけなら700万+、ってところかそれに比べて魏は3000万近いし、すぐ袁紹が負けちゃったから争いがながびかなくて人口が史実ほど減らない状況かもしれない。さらに統治が悪いから南から北に行ったなんて状態だったら目も当てられない。乱世が終われば幽霊人口も減るし、都会の北に行く奴が増えるだろうし、屯田民が魏にはいっぱいいるんだよな。あれは別の戸籍にしてたはず…うん、国力に差がありすぎる。さらに広がるのかよ。

天下三分なんてなかった。豪族がすぐ暴れる統治がめんどくさいとこ押しつけたようにしか見えないのは気のせいだろうか？まあ、つまり魏について行けば勝ち組決定！さあ恩売るぜー！

第8話 打算（後書き）

人口が前漢のものだったので修正しました。

第9話 孝廉（前書き）

自分で書いてて分かりにくいのでまとめてみた
間違ってるかもしれないので注意！

後漢王朝の人材登用制度

1、辟召：三公や九卿、太守、県令といった身分の人達が自分の裁量で、自由に人材を採用できるもの。宦官や官僚などはこれを乱用して自己の勢力拡大を行っている。袁家は故吏の関係を結んだ人々が数多く存在し、袁紹の代には非常に豊富な故吏関係の人脈と支持を得ていた。故吏は恩愛や義理が発生する為、職務上の上下関係が切れても情誼が継続する。袁紹に辟召してもらったら一生袁紹のパシリ…イヤすぎる

2、徴召：皇帝自らが人材を登用するもの。食っちゃ寝してた靈帝がどれくらいやってたのかはわからない。

3、選挙：人口20万に1人の割合で、太守が州や郡から才能あるものを採用する「孝廉」と州勅使が1名採用する「茂才」。天変地異が起きた時に皇帝が採用する「制科」がある。

第9話 孝廉

陽side

ふふふ、これで俺も勝ち組か！

本当に精神的につらかった。ただの大学生が何十万人の命を背負うなんて無理無理。

さあ、ここが正念場だ。

「君は曹孟徳だね。」

なんか手遅れっぽいかなけなしの威厳を持たせていこう。

「そうですが、なぜ私の名を？」

おお、さすが曹操。空気読める。

エアリーディング検定2級をあげよう

「橋玄殿が君を高く評価していると聞いてね。それに治世の能臣、乱世の奸雄という評価を受けた君に興味があった。だがこの役職に付いていないので直接話してみようと思ったら、さっきみたいな状態になったってわけだ。」

「私がなぜ役職に付いていないか知っているのではないですか？」

目が怖い。あれ、これって皮肉言ってると思われてる？

やばいからさっさと本題に入ろう。ここで敵認定されたら終わる。

「知っている。もしよければ私が君を孝廉に推挙しようと思うんだ。」

「辟召ではなくですか？」

「やっぱり頭の回転が速すぎる。」

「自分の派閥に組み込まうとしてるのかと警戒してるよ。」

「ああ、孝廉を使つてだ。孝廉は天才、秀才を集めるためのもの。君を推挙することになんの問題もない。君が警戒しているような自分の派閥に入れようなんて考えはないよ。」

「貸し借りはないと？」

「そうだな…さっきのことを許してくれることで貸し借り無しなんてどうだい？」

「そんなことでよろしいのであれば」

「敬語もいらさないよ。将来私の上に立つであろう君に敬語なんて使われてたら、実際君が私の上に立った時困ると思うんだ。」

「…わかったわ。私の事は華琳と呼んで頂戴。」

「じゃあ俺の事は陽と呼んでくれ。」

将来私の上に立つであろう君……

皇族であり、わずか数年で今の地位を築きあげた劉表……いや陽が自分の上に立つ存在だと私を認めた？

いや、違う。そんなものではない。

彼はこう言っているのだ。「自分の上に立って見せろ」と

尚書省に実権を移した事によって国家機構・官僚制度が形骸化し、意志がまったく反映されない貴族は不満を持っているだろう。失敗はしたが彼らが皇帝に対して牙をむいたという事実がそれを証明している。第2次党錮の禁があれほどまでに厳しくなったのも皇帝を傀儡にしようとする動きがあったからだ。皇帝権力対貴族勢力。これはもう避けられない。皇帝を傀儡にしたい貴族、貴族を邪魔に思っている皇帝。そこに民の現体制への不満が加わるのだ。戦乱が起きる事は間違いない。

愚かにもどちらも譲る事はしないのでしょね。自分達が滅びるその瞬間まで

私が彼の上に立つ。それはこの国の崩壊を意味するだろう。つまり乱世においての競争相手として私を選んだ。

面白い！思わず笑みが洩れる

ええ、あなたの上に立って見せましょう。あなたを下したそのあとで……

よし、多分うまくいった。

これで老後の心配はしなくていいかな。

これからはのんびり書類仕事でもしよう。

あとは華琳が出世していくのを支援してればいいだろ

余談だが孝廉は家柄・人柄・風貌の3つで合否判定する

家柄：宦官の養い孫だから必然的に最低の評価

人柄：自分以外を下に見てるような感じがする

風貌：金髪ツインドリルに髑髏じゃなくて、かわいらしい少女つと

あれ、普通に不合格じゃね？と頭を悩ませる劉表の姿があったとか
なかったとか

第10話 王国（前書き）

早く黄巾編に行きたいと思う今日この頃
にわか知識では辛くなってきた。

第10話 王国

劉焉 side

「ちつ、この国はもう終わりだな。」

皇帝の縁戚、九卿の筆頭などと肩書はあれど終わる国の官僚など何の意味もない。

ならばどうするか？全国支配なんてものはバカのやる事だ

一州を支配するだけで十分だろう

だからといって刺史などただ巡検して報告するだけの単なる飾り物。それに軍事権の無い刺史など太守達から煙たがられて殺されるだけだ。

いや、待てよ。なら軍事権を刺史に持たせてしまえばどうだ。

羌や鮮卑といった異民族の侵攻が活発になっている上、反乱もたびたび勃発。それを鎮圧する事すら難しくなっている現状は知っているだろう。それらに対する起死回生の手とでもいってあの馬鹿を唆して認めさせてやろうか。

名は州牧とでも名付けておこう

場所は交州がいいか。あそこなら人知れず着々と事を運び自分の王国を築く事も可能だろう。

私だけでは目立ちすぎるだろうから評判のいい劉表と劉虞も推挙してやろうか？

（洛陽）

「陛下、刺史や太守は賄賂で官職につき、民を虐げ、朝廷への離反を招いております。清廉の評判高い重臣を選んで地方の長官とし、国内を鎮定すべきだと存じます。」

「劉焉失礼であろう！」

「陛下！」

「…考えておく。」

ちっ、やはりだめか。奴にとっては官位は打ち出の小槌だ。金や物を望むだけ出してくれる存在。それを手放せと言ったところですからわけがない。

いらいらする。何か手はないのか…

「劉焉様、都は今まさに乱れんとし、天文では益州の分野に天子の気がございますよ。」

董扶か…もしやお前も

「益州か…その手もあつたか…もしかしてお前も私と同じ事を？」

跪いている董扶が目の前にいる…おもしろい

「儒宗と仰がれたお前がいるなら百人力だ。それにお前は益州出身だったな？」

「はい、それに益州は独立機運の高い場所。善政を行えば民は付いてくるでしょう。」

益州は漢の高祖が帝業を成就した土地だけはある。

成都平原に農業用水網が敷かれ沃野千里として有名なうえ唯一の陸路は8里の高さの太白山を超え蜀の栈道と呼ばれる断崖に穴を穿ちがち、丸太を差し込んで渡り板を踏みながら進まなければならないのだ

まさに私が求めているものだ。豊かで戦禍から逃れることもできる。

「劉焉様、あと2人は推挙しておきましょう。劉焉様のみでは目立つでしょうから。」

「ああ、劉表と劉虞を押すつもりだ。」

「劉虞様は良いとして劉表様ですか。彼はまだ太守では？」

「ああ、あいつは同じ魯の恭王の末裔ということ出会った事があるが劉虞と同じで欲というものをどこかにおいて来てしまったような奴だ。人気も高い。それに聞くところによると農作物の収穫を増やす方法を知っているらしいからな。推挙して恩を売っておいて損はないだろう。」

「なるほど。」

「まあ、しつこく言っていくつもりだ。この王朝の終わりは近いのだからな。州牧制の導入も決断せざるを得無くなるだろう。」

第11話 州牧（前書き）

呉ルート見直したら劉表居た……居たのかよ！あまりにモブすぎて見逃してた。散々居なかった人扱いしてたのは劉表への愛が足りなかったからかと思ひ、劉表が唯一武人として輝いた荊州動乱のここを力入れてやる事にしました。王叡ファンの方ごめんなさい。

第11話 州牧

（洛陽）

「陛下。并州では張奐殿が、涼州では耿鄙の両刺史が殺され、益州では逆に卻儉が重税を取り立て居ります。さらに荊州に至っては刺史の王叡殿に加え長沙の太守が殺され、区星という輩が始皇帝を名乗り騒動を起こしているらしく統制がとれずにあります。」

「むむむ、どうすればいい？」

「陛下！今こそ州牧制を導入すべきです！」

「…劉焉よ。それでこの騒動が収まるか？」

「もちろんでございます。」

「ならばよし。して人選は？」

「劉虞、劉表、そして私がよろしいかと。」

劉虞は烏桓の間でも声望が厚い。幽州牧へ任命すれば烏桓は戦わずして帰順するでしょう。

劉表は赤き精強な騎馬隊を持ち、任地で1人の犠牲も出さずに賊を討伐した戦巧者。区星ごときひと月も経たずに討伐する事が出来ましよう。

そして私劉焉は皇帝の縁戚であるとともに九卿の筆頭。この州牧制が本気であると示すにちょうどよいかと。さらに益州では重税で人心が離れつつあります。このままでは陛下に反旗を翻すやもしれません。これを抑えるに私以上の者はいないでしょう。」

「……いいだろう。良きに計らえ。」

「畏まりました！」

劉表 side

「劉表よ、荊州の民は頼りにする者も無く、怨嗟の聲が野に満ち満ちている。直ちに荊州へ向かい区星を討伐、法を施し万民を導け。」

・・・はあ？

何言ってるんこのブタ皇帝陛下は

「し、失礼ですが私より相応しいものが居られるのではないでしようか？」

そうだ荊州行きなんて死亡フラグ全開。

孫家から3代に渡っても狙われるなんて半端ねえ。

たしか連合とかも組まれてた気がするし、まじ孫家死亡フラグ。

「劉焉の推挙だ。劉表よ。聞くところによるとお前は赤き精強な騎馬隊を持ち1人の犠牲も出さずに賊を討伐した戦巧者という話ではないか。お前以上に相応しいものがあるとは思えないのだが？」

えーっつと赤備えT u e e e e やつてた罰ですか？

ここまで言われて断ったら殺されそう。

なんでこんなことになった。劉焉さん恨むぞ。

「劉表を荊州牧及び鎮南將軍に命じる！」

「…畏まりました。謹んでお受けいたします」

〔洛陽・劉表の屋敷　劉表〕

「まじでどうなってんだー！ー！ー！」

「うるさいですよ。なにがあつたんですか？」

「荊州牧にさせられた。しかも鎮南將軍もくっ付いてきた。」

「よかつたじゃないですか。大出世ですよ。」

くっ 菖蒲の奴何時もあわてないな

「また他人事みたいに…勅使の王叡に加え長沙の太守のが殺され区星とかいう奴が始皇帝とかなのつて好き勝手してるからなんとかしろ。面倒事を押しつけたようにしか思えん。」

王叡とか孫堅が周りの奴脅すために殺した奴じゃん。区星もなんだよ始皇帝つて、自称將軍（笑）じゃなかったのかよ。なんでアホさ加減がパワーアップしてんの。

「その区星さんなんですけど本当は黒山賊の張燕のように適当に暴れてれば貴族になれるんじゃないかなと思つて賊を結成したらいいのですが、ええつと、あまりに簡単に勅使と太守が殺せたので…はあ」

なんかあまりのアホさに頭を痛めてる。ある意味すげえよ区星。

「調子に乗って始皇帝。アホすぎるだろ。」

「で、どうしますか？」

「鎮圧するしかなんじゃない？」

「それはいいのですが…周りの豪族達がそれを隠れ蓑に暴れているんですよ。」

「なにそれ？」

「荊州は大きく分けて2つの派閥があるのはご存知でしょうか？100年ものあいだ、州政や利権をめぐって水面下で対立していたんですが勅使の死によって監視役が居なくなり、朝廷の目も区星に向いているので派手に動いても大丈夫だとしても思ったのか武力衝突が起きてます。」

「……」

「長沙の太守がその派閥の大幹部だったようですので力の均衡が崩れました。優勢な派閥はおそらく相手を滅ぼすまで止まらないでしょうね。黒山賊の張燕を貴族としたことで漢王朝に賊を討伐する力すらないと言ってしまったようなものですから安心して事がおこせるでしょう。そしてすべてがおわったあと区星がやった事にしてしまえばいい。」

「規模は？」

「豪族100名以上。荊州をどちらの派閥が支配するか100年戦

い続けてきたんです。しかしそこに朝廷から一州の軍事・政治の大権を持つ州牧が来ました。どちらもこれを利用しない手はないでしょうね。どちらの派閥につくか決めておいた方がいいですよ。お互いの力が弱くなるまで待つからです。どうしますか？」

「宜城へ行く。準備をしておいてくれ。」

「宜城：たしか蔡瑁さんと萌良・萌越兄弟がいる所でしたね。そちらに付くのですか？」

「俺が権力闘争嫌いなのは知ってるだろ？」

「……はあ。分かりました。準備しておきますね。」

第12話 策謀

〔荊州・宜城 崩越〕

ちっ、なさけねえですね。どいつもこいつも

蘇代の馬鹿が区星なんて小物にやられちまったせいでこっちにまでとぼっちりが来るなんてほんと冗談じゃねえです。

裏切っちまいましたよ？もともとこんな派閥なんてもんは仮初のもんでここで勝ったところでまた争い始めるに決まってるんですから義理なんぞ感じる必要ねえですし。

手土産にはこっちの情報と化物乳の頸で足りるでしょうかね。

化物乳は水軍では胸ぐらい化物ですけど陸じゃ優秀な武將止まり、張虎と陳生の糞野郎共もそれは分かっているから陸からくる。時間はないでしょうね畜生。

睡蓮姉さんの安全を確保するためには早ければ早いほどいいでしょうからさっさと化物乳を殺す方法でも考えちまいますよ？

「薊ちゃん？」

「な、なんですか姉さん」

「もう、さつきから呼んでるのに返事してくれないんだもん。」

「すみません姉さん。何か御用ですか？」

「お客さんだよ。荊州牧の劉表さんって人が私と薊ちゃんと蘭ちゃんにお話があるんだって。」

「はあ？なんでこんな時期にここにやって来やがるんですか？」

漢寿にも襄陽にもそんな奴が来たなんて情報入ってきてなんかねえですよ。

「……お客は何人ですか？」

「劉表さん一人だよ。部曲の人たちは外で待つてるんだって。」

何考えてんですかその劉表ってやつは。単身の城に乗り込むなんてどこの英雄気取りですか。

しかも、こっちに連絡なしで来るなんて礼儀知らずにも程があんでしょう。

まあただのバカなら利用してやりましょうか。

「分かりました。今から向かいますね。」

〈荊州・宜城〉

「お待たせしてしまつて大変申し訳ございません。」

3人が頭を下げる。2人は姉妹なのかそっくりなのだが纏っているオーラと言つか雰囲気全然違う。ひとりのはのんびりとしたような感じがするがもう一人は蛇に睨まれているような感じ。長髪 of 金髪で透けるような白い肌をした着物を着た少女達である。もう一人は赤い髪に暴力的なまでの巨乳の美人で白いブラウスに黒のタイトスカートでOLのような恰好をしていた。なんだか苦労してますというのがにじみ出てる。

「いえ、急に押しかけた私が悪いので謝らないでください。」

劉表が謝意を述べる

「では、改めまして私は萌越といたします。お見知り置きを」

片方は睨みつけるような視線を外すことなく、言葉だけは丁寧に戻す

「私は萌良だよ！」

もう片方は、隣の雰囲気など我関せずとばかりに明るい声で答えた

「蔡瑁だ。」

付き合いが長いのだろうか、赤い髪の女性は2人の態度の違いをまったく気にすることなく平然と答えた。

「俺は劉表。新しく荊州の牧として赴任してきた。」

「それで劉州牧がこんなところにどのような御用ですか？」

萌越が疑問を述べる。

「頼む。どうか教えて欲しい。州牧として州を統すべらなくてはならない。威令をゆき届かせる為には、軍権を持つ事が肝要なところ迄は解るんだ。だが果して豪族勢力割拠する中で、どうすれば軍兵は集まる？」

「…民衆が付き従わないのは、仁愛が不足していたからです。付き従いながらも治まらないのは、信義が不足していたからです。仁義の道が実施されれば、人民は水が下へ流れる如く、身を寄せて来るでしょう。その心構えさえ有れば、不服従を心配される必要はない

のです！」

崩良が自信満々に言った。

たしかにこの時代徳というのは重要な意味を持つ

儒教の徳目いわば名声を吟味し登用すると光武帝が定めたからだ。

だからこそ後漢の登用制度は推薦ばかりなのだが今は軍隊の集め方について聞いているのだ。

崩越が崩良を見て一瞬顔をほころばせていたが、劉表の求めていることを察知したのか

「平時の政事は仁愛と道義を第1とし、混乱時の政事は、時宜に適した策謀を第1とするものです。姉さんの言う通りにすれば確かに治まるでしょう。しかし道に外れた者に処断する事も必要でしょうね。」

とあくまで姉の言う事は正しい事を強調しながら言った

「ああ、そうだな。こんな時に暴れているんだ。処断する必要もあるだろう」

蔡瑁も同意する

「戦さは兵力の多さに懸かっているのでは無く、人物を配下に治めるかどうかにか懸かっています。豪族の指導者達は貪欲で乱暴な者が多く、部下の頭痛の種になっているのが現状。彼等の中に、私が昔から面倒を見てやっていた者も居ります。その者を利をもって誘えば、手下を引き連れてやって来るでしょう。」

「つまり、君達の敵の派閥につくと見せかけて皆殺しにするってことかい？」

劉表が核心を突く。利をもって誘えば、手下を引き連れてやって来る。簡単に言ってしまうえば簡単に裏切るということ。処断する対象として見ているのだろうか。

「…平たく言えばそうなりますね。」

「それで構わないがもしその策後政策として民屯をやるつもり思うんだ。」

劉表が同意を示し、話を変える。

「薊ちゃん。民屯ってなに？」

「私も知らないですね。何ですかそれは？」

「簡単に言ってしまうえば土地を失った流民や降民を募って農耕に従事させること。初めは鉄製農具と種子の貸し出し、希望者のは牛の貸し出しを行うつもり。まあ私牛の所有者は二公八民、官牛の貸与者は三公七民ってところかな。」

「ちっ、そういうことですか。」

萌越の態度が豹変した

「え、どうしたの薊ちゃん？」

「姉さん。簡単に言ってしまうえばこいつは豪族から隷属農民を取り上げる気なんですよ。なにが流民や降民ですか。豪族の領地にいる隷属農民が手にするのはだいたい収穫量の3分の1程度。そいつら

の前に税は高くても3割、しかも鉄製の農具の貸し出し、牛も貸し出すなんていったらどうなると思いますか？しかもこいつは聞くところによると収穫量を増やす方法を知ってるとかいう話ですからね。農民はそっちに飛びつく。皇族で州牧ですからね信頼も違うでしょう。そうなたら豪族達はせつかく土地を奪ってもも人がいなくなる。そんな状態にしゃがったこいつに反乱をおこすでしょうね。こいつはあっちのやつらの指導者を殺して兵を奪った後こっちの派閥の奴らの前でこの政策をやって馬鹿な豪族連中を煽って処断することです。」

「取り上げる気なんてもないですよ。ただ自主的に選ばせるだけ。それにあなたが言ったのですよ。豪族の指導者達は貪欲で乱暴な者が多く、部下の頭痛の種になっているのが現状。そんな豪族は処断してしまえばいい。ただ勘違いしないでほしいのは優秀な人材は厚遇する。大陸公路上の都市を任されるといことが、どのような意味を持つかが分かるものを紹介してくればありがたい。」

「そんなもん居るわけねえでしょう。わかんねえから領地の奪い合いでんすよ。自分の領地だけでいいと思ってる奴はいますが、収入が減って喜ぶ奴なんているわけない。∴それで私たちがこの話に乗ったとして地位の方はどうなりやがるんですか？ただでこんな事するとおもってるほど馬鹿じゃないでしょう？」

「萌良・萌越さん達は新しく作る情報長官と副長官、蔡瑁さんは水軍総司令官の予定だ。」

「どうしますか蘭？こいつは私たちにこう言ってますよ。荊州の要である情報と水上交通を任せてやる。命は助けてやるし地位も与えてやるからこっちにつけ。私たちはろくな領地もってないからいいことづくめでいいですけど、あなたはかなり領地を持つてるはずで

しょう。ここでこいつを殺すという手もありますが…」

「……馬鹿にするなよ薊。長官無しの状態で、一州を維持してゆくのは到底無理なんだ。そうなれば全財産と既得権益の全て失う。それにこのままだと死ぬだけだ。乗るしかないだろう。それにこっちも税を下げれば出ていかないと思うしな。」

蔡瑁は胃を抑えながらそう言った。今までの半分以下の税にしなれば小作人が逃げてしまう。命は助かったが収入が半分以下になるのだ。いろいろと見直す必要がある。溺れているところを助けてもらったが財産の半分持ってかれた状態だ。

「ちつ、とんだ腹黒野郎ですねてめえは。区星の野郎に感謝しなきゃなんねえですね。もしこっちが動いていたらあっちに行つて私たちを殺していたでしょうねこいつは」

劉表がこちらに付いたのはいくつか理由があるが、もっとも大きな理由があつちの派閥が許しなく私軍を動かしたのでこちらは自己防衛のために軍を動かしたという言い訳ができること。それで已む無く殺してしまつたとそう言つてしまえばいい。？統の親類が萌越の部下である事などもある。できれば？統欲しいなという劉表の私欲である。

「腹黒なんてひどいな。俺は皇帝に任された荊州の民の為に最善を尽くそうとしているだけだよ。」

「まあまあ、劉表さんも薊ちゃんも蘭ちゃんも落ち着いて。あ、そうだ私の真名は睡蓮だよ。よろしくね！」

「な！」

「ちょっと姉さん。」

「俺の真名は陽だ。よろしく。」

「姉さんが教えたんじゃないですよ。いやですけど教えてあげます。私は薊です。」

「はあ、まあ命預けるんだ。蘭だ。よろしく。」

「よろしく。俺の事は陽と呼んでくれればいいよ。」

陽side

漢衰退の大きな原因となった黄巾の乱。恋姫世界では3姉妹が原因っぽい為がそんなことはない。史実でも黄巾の乱は信仰心に基づく宗教的側面より社会構造の問題が顕在していたから起きたものだからだ。

地方豪族の領主化が進み大土地所有が増えていき、地方に私的権力基盤を拡大し、巨利を築こうとする者たちが増えてきたところで宦官が新しい大領主として土地の収奪をしたことで土地を失った人が大発生したために起きたのだ。豪族や貴族達がやってるのに宦官も加わったため、1000万人という土地を持ってない農民ができた。… 反乱がおきないわけがない。

だからその農民たちに屯田でもやって土地を与えてやれば荊州に人が集まるんじゃないのか。とか思って屯田やってみようとしたら税が問題になった。大土地所有した豪族はその土地で農民を働かせるんだがその税が高い！なんだよ6割以上って、だがそれより下の税

をすれば貴族とか豪族が騒ぐ。だったらこの機会を使って強欲な貴族や豪族に対処する必要がある。所詮貴族や豪族の連帯など己の利益を守るために団結しているだけであって、相手に勝ったところでまた内部で戦い始めるだろうしどっちかに肩入れしたところでまた争い始めるきりがない。

史実において劉表は片方に肩入れたんだがまた権力闘争する豪族に足を引つ張られ自由に動けなかった。官渡の鬪いの時南部の豪族に邪魔をされ動けなかったり、荊州でクーデターが起きそうになったりもしたそう。劉備にそこを突かれ後継者争いがひどくなった。そんな状態で孫揚州の倍以上の人数が劉荊州に移民して来ているのだから正史劉表の政治能力の高さはまさに反則と言えるものだったのだろう。

それでも豪族の暴走に振り回されるんだから足ばかり引つ張る豪族の利害調整するよりここで後顧の憂いを断つておいた方がいいだろう。そこで豪族達よりはるかに安い税率の屯田をして肅清ではなく反乱してもらえば大義名分をもって討伐できる。俺が手を下せるのはのはあくまで反乱を起こした者や秩序を乱した者だけだしそれを理解できるものはこんな手に乗らないだろうし、優秀だろうから厚遇すればいい。皮革、魚、材木、海塩、銅の産地の揚州。沃野であり、銅、鉄、竹、木、馬の産地の益州。この2州にない利点が5州に連なるといふ地理的優位。戦乱では戦力の分散をしなければならぬので不利になりそうだが…。まあこの屯田政策は人口も増え、資金も得られるし、中央集権もできるし、軍事的機動力の保証も得られるし、黄巾対策にもなる一石五鳥。やらないって手はないな。

第12話 策謀（後書き）

作者にはちよつと策謀とか駆け引きとか無理だと分かった。何度直してもおかしい。

豪族や宦官は今でいう地上げ屋？を使って土地を民から奪っていて奪った土地に小作人を集めて安い賃金で働かせている。そこで国が保証する給料の高い仕事をぶら下げて人を奪ってしまおうをするのが主人公の考え。

史実の黄巾は1000万ともいわれる生存基盤を奪われた農民たちを救うため張角が立ち上がったもの？。恋姫の世界でもそういった農民がたくさんいるならならその人たちに仕事や居場所を与えちゃえばいいんじゃないか。という楽観的な考えですね

修正：3〜5になつてました多すぎですね。2〜3に修正。

鎮南將軍位に就いた時に持節を貰っていて持節は非常時には二千石以下の官職、つまり九卿よりも下の官職であれば独断で処刑できる権限を持っています。この場合軍規を犯していた。彼らを処断することができる権限は持つていたという認識で…

設定資料つばいの（前書き）

設定資料みたいなもの作ろうとして失敗したもの。

「第8話 打算」の人口比のところが前漢の人口になっていたので修正をするついでに…

ちよつと本文中で分かりずらいところとかの補足なんかを…逐次更新していくつもりです。

4月30日 なんか見ずらいし、考察とかも邪魔だと思ったのでサンプルに余計な部分を消しました。

馬の値段は本当に修正ばかり…資料が1銭10円計算の人だったので私は100円計算なので2億円と言う数字に…

設定資料つばいの

・給料（サイトや本によって全く違うので参考程度に見てください）
1石＝100銭計算でやってます。1石＝3銭の時もあり、董卓銭
でハイパーインフレを起した時は1石＝500000銭の時とかめ
ちやくちやなので…察してください。

農家（理想的な）：1戸（4人～5人）年400石？（70石と言
う所も） 年100000銭

客傭：月10000銭

労賃（一般）：月600

兵役の代傭：1年29000

役人：年600000銭

・物価

綿布（服一着分）224銭

絹（服一着分）500銭

馬（1匹）50000 - 20万銭 戦乱では軍馬は20万が平均価格に

耕牛（1頭）18000銭 これも戦乱では価値が上がり蜀では15
0000銭

・気候

九州と同じくらいの緯度にある土地の水路が凍結していることから
寒冷期にあると思われる。

人々の大移動（益州・荊州は約270万人、揚州は約130万人）
は戦火だけでなく冷害に悩まされた人々が南下してきたと考えられ
る。豪族・貴族の私的農民がかなりいたので実際はもっと移動して
いたつばい。例を言えば荊州南部の人口が分かっているだけでも5
倍増えた。

・貨幣

当時の貨幣は五銖銭で一銭100円だったり180円だったりサイトによって違うので100円に
五銖銭のみの流通が前漢の不況の元凶。五銖銭は経済規模に対して
少なすぎた。

董卓が貨幣改鑄やったらインフレは年率62400%から124900%になり魏が治めていた地域は貨幣がほとんど通じなくなってしまうた。(呉や蜀には銅山が沢山あったが河北にはほとんどなく曹丕が呉を攻めたのも銅が欲しかったためとの考察がある。)

・教育

今の大学っぽいもの太学が存在した。試験内容は規定された量の暗唱と章句の解釈。入学一年後に試験(射策)され。

成績優秀者は郎中に、一經に通じたものは文学掌故になり、成績の低いものは退学。

覚える字数は九千字以上。

後漢の洛陽では太学に学生30000人がいたらしいが、安帝が勉強嫌いだつたため一度廃墟となつた。立て直すも党錮の禁で1000人も逮捕者が出たうえ靈帝が大学生を重用しなくなつた。

新の王莽は日本で言う小学校、高校、大学を作つたがすぐに滅んだため成果は不明

後漢は近代中国になるまでの間、どの王朝より識字率が高かつたそうな。

・軍隊

鎧の普及率は40%前後でエリートの特証。

1日の標準行軍速度は30里(約12.4km)で戦場に向かう時

到着兵力は3分の2。

9万の軍に一ヶ月必要な穀物量は、穀物300万キ口、塩4335キ口、飼料375万キ口。

連弩は孔明が個人で携帯できる様に小型化した事で有名だがまだ固定砲台の扱い。

弩の普及率は1割未満。高い。

歩兵10万に対し、騎兵1万。（袁紹軍の例）騎兵はスーパーエリート。平時は馬一頭あたり50万円から2000万円程度で戦乱になると（涼州などの）良い軍馬は5千万円程の価値になった。

豪族の私兵のことを部曲という。

戦象は一日に100キ口以上のエサを食べる上に乱戦になると制御不能。河北には当時像がいた

曹操の巨大投石機は500メートル以上飛んだと言われている。これくらいの性能の投石機が次に歴史にでてくるのはは千年後。

・人口

司隸310万・豫州617万人・冀州593万人・？州405万人・徐州357万人・青州419万人・涼州40万人・并州69万・幽州204万人・益州724万人・交州137万人・荊州627万人・揚州433万人。黄巾前のものでなくてもっと少なくなると思います。（例：冀州は140万人にまで減ったとか）参考までに
ちなみに三国成立後の把握人口は三国合わせても700万強程度。

郡や国

司隸：河南尹、河内郡、河東郡、弘農郡、京兆尹、左馮翊、右扶風
予州：潁川郡、汝南郡、梁国、沛国、陳国、魯国

冀州：魏郡、鉅鹿郡、常山国、中山国、安平国、河間国、清河国、
趙国、渤海郡

？州：陳留郡、東郡、東平国、任城国、泰山郡、濟北国、山陽郡、

済陰郡

徐州：東海郡、琅邪国、彭城国、広陵郡、下？国
青州：済南国、平原郡、楽安国、北海国、東萊郡、斉国

幽州：？郡、広陽郡、代郡、上谷郡、漁陽郡、右北平郡、遼西郡、
遼東郡、玄菟郡、楽浪郡、遼東属国

并州：上党郡、太原郡、上郡郡、西河郡、五原郡、雲中郡、定襄郡、
雁門郡、朔方郡

涼州：隴西郡、漢陽郡、武都郡、金城郡、安定郡、北地郡、武威郡、
張掖郡、酒泉郡、敦煌郡、張掖属国、張掖居延属国

益州：漢中郡、巴郡、広漢郡、蜀郡、？為郡、？柯郡、越スイ郡、
益州郡、永昌郡、広漢属国、蜀郡属国、？為属国

荊州：南陽郡、南郡、江夏郡、零陵郡、桂陽郡、武陵郡、長沙郡
揚州：九江郡、丹陽郡、廬江郡、会稽郡、呉郡、予章郡

交州：南海郡、蒼梧郡、鬱林郡、合浦郡、交阯郡、九真郡、日南郡

光武帝は郡や県、侯国を併合させ、官職を前漢に比べ4分の1ほど
まで減らしたが順帝（126～144）となると前漢より人口が1
000万も少ないのに郡、県の数は増え、役人の数も多くなってい
る。

・住居

貧民は半地下住居。レンガでできてるらしい
4147・2mで1郷。3郷をまとめて1県。
1180の県がある。

・医療

全身麻酔による手術が行われていて内臓の病気で治らない場合は、腹を切開し、内臓を取り出して洗浄して戻し、縫い合わせ、軟膏をすりこんでおくなど行った。

とはいっても民は栄養失調が原因で肝臓の萎縮が起こったり、呼吸器病にかかって死んでしまいう方が多いので手厚い看護とちゃんとした食事を得るだけでほとんどの病人が数日後には元気になったりする。

神農本草経が後漢時代に完成。薬の種類は全365種

女性死亡率は男性より5割高い、妊娠時に死亡し易いため。死体の2/3は子ども。と医療技術は高いが上流階級のみが受けられるもの。

・名士

世論・名声のみを拠り所として、新しい価値秩序を樹立しようとする存在。

曹操の参謀である陳羣の祖父陳寔は「国家の刑罰は受ける事が有っても、陳寔様に謗しられる事だけはしたく無い」と言われるまで人々から支持と畏敬の念を獲得していた名士

遠隔地の者であれば、土地を売り払い、その財貨と民衆を引き連れて来る名士さえいる。

・出世

皇族の出世ルート（劉焉例）洛陽令 州勅史 太守 九卿 州牧

この小説劉表は洛陽令 太守 州牧といろいろと飛ばしています。

九卿編や尚書編はつまらなそうなので辞めたため変な出世になります。

名家が辟紹しまくっているので出世はほとんどコネ次第。

・税

人頭税には16歳から56歳までの男女に付き年間120銭＝1算

を収める口算と7歳から14歳までの男女に付き20銭を収める口賦がある。財産税は咨算と呼ばれ、財産1万銭に付き年間1算を収める。口算と咨算を合わせて算賦と呼ばれる。農民は収穫量の30分の一を納めるまた商人は口算を2倍を収めねばならない。市税?は1割、毎月納税

・宦官

司馬遷(史記書いた人)が宦官の側近第1号。この先例がやがて制度化されて皇帝の命令が宦官を仲介にして下されるようになった。

宦官は一步外に出れば雑役夫。皇帝の寵愛あつてこそ今の地位に居られるので、皇帝にとって唯一と言つていい自分を裏切れない部下順帝が宦官に財産の世襲と家督を養子に継がせることの許可を出したことにより、宦官の周りに親族集団を形成させてしまった。それまでは宦官が私腹を増やしても個人の範囲を超えようがなかった。

・黄巾の乱

「蒼天已死、黄天当立。 歳在甲子、天下大吉」をスローガンを掲げた革命軍。

農民たちは周囲に城壁を巡らせた町の中朝出掛けては夕には帰つて来るといふ、生活パターンで生きていたが地方豪族の領主化・大土地所有化が進み大多数の零細農民達が、唯一の生存基盤であった土地を失い、棄民となった。それを救うためにもっとも大土地所有化が進んでいる河北地方に弟子を送り、黄巾の乱が起こった。

太平道が世に広まった最大の理由は治病してもらつたため。己の犯した罪を反省させ悔い改めさせた後、符水を飲んで吞んで祈祷すると病気が治るといふもの。ほとんどの病人は栄養失調と過度のストレ

スで衰弱している状態なので手厚い看護と栄養食を食べると数日で元気になることが多い。これをご利益と勘違いして口から口へと急速に伝わり爆発的に信者を増やした。

・皇帝

4代目以降平均即位年齢9歳、平均寿命21歳。

外戚の専横 宦官使つて外戚を肅清 外戚の専横 宦官使つて外戚を肅清を繰り返してゐる状態。

・皇族

税金払わなくていい。

・天

「天」は日食・地震・洪水・日照り・落雷など自然界に異常現象を引き起こす事によつて、皇帝に警告を与える。だから皇帝は霊台を設けて四六時中監視させている。

農耕はすべて自然(天)任せなので、農民にとっては天をコントロール出来る皇帝は神に等しい。しかし皇帝は、適度に雨を降らせ、程よい日照を与える義務もできる。

・清流派

清流豪族は領主のように民衆を所有しつつ、民衆の支持に支えられもした者。清流豪族は搾取する関係にありながら支持されているという矛盾した存在。光武帝は民を救済することで得られるとした徳目と名声は、一族のなかの貧者を、金銭で助けることで得られることに変化している。

親を愛すること<考>の延長として、人を愛する事<仁>がある。

・官職

三公

司徒…政治を司る

司空…官吏の不正取締りに当る 水産、土木、司法の最高責任者だ
つた（例：董卓）

太尉…軍事の最高責任者

九卿

太常…礼儀・祭祀及び天子の行なう行事を司る（例：劉焉）

光祿勳…宮殿の門戸宿衛を司り、殿中侍衛の士をとりしきる

衛尉…宮門の衛士、宮中の巡察を司る

太僕…車馬を司る

廷尉…裁判を司る

大鴻臚…諸侯及び四方の帰順した蛮族を司る

宗正…皇室親族関係を司る（例：劉虞）

大司農…金銭や穀物などを司る

少府…宮中の諸々の仕事を司る

・爵位

正一品 王

従一品 郡王、国公、開国郡公、開国県公、嗣王

正二品 開国侯、開国郡公、郡公

従二品 開国県公、開国県侯

正三品 開国伯

従五品 開国県男、開国男

以下少上造、右更、中更、左更、右庶長、左庶長、五大夫、政戾庶
長など。（略）

公大夫、官大夫、大夫、不更、簪？、上造、公士は民爵といい民に
与えられたもの。

武帝の頃から売爵しまくっているので名譽的な価値は軽い。
ちなみに劉表は？州の成武（県）侯。
最上級の位の列侯になると侯国と呼ばれる領地を与えられ、収穫される農作物の、三十分の一を貰える。

・將軍位

大將軍：武官最高位で権力は三公を凌ぎ、大將軍府を開いて政治・軍事の両面を統括する。外戚がこの地位に就くのが慣例になっている。

驃騎將軍：輕騎兵を司る。三公と同格の地位。

車騎將軍：戦車と騎兵を司る。反董卓連合の時、袁紹はこの地位を自称した。

衛將軍：天子・王の衛りを司る。中央防衛軍の總司令官。

四方將軍（前後左右）：中央軍司令官。九卿に匹敵する地位。

四征將軍・四鎮將軍：方面軍司令官。各方面に駐屯し、その地域の州牧・州刺史を統率する。四征將軍は征伐軍、四鎮將軍は防衛軍を率いる。併設される事は無い。

四安將軍：四征將軍・四鎮將軍の補佐官。

四平將軍：四征將軍・四鎮將軍の補佐官。

外戚

光武・明帝の時期までは、どれだけ功を上げてても外戚の官位は九卿までだった。和帝から、太傅・録尚書事が外戚に占められるようになった。

漢三大都市。

洛陽、長安、宛の三つで、長安は赤眉軍によって破壊されゴーストタウン状態となっていて年間水運費用が20億銭と漢の年間軍事・外交費用と同額かかる為、立て直そうとするものが居ない。後漢では洛陽、宛が2大都市として機能している。

教育

孫子の兵法を学ぶだけでも、呉の孫子本文八十二卷・図説が九卷と斉の孫子本文八十九卷・図説が四卷という膨大な量の書物がなければならぬ。

洛陽に遊学する為に必要な資金は2万銭〜10万銭程度必要。

豪族の私民

豪族の私有農民となると基本収穫量の二分の一取られ、種子や農具、住宅、食糧などを借りると四分の三は取られるので生きていく事に必要な分くらいしか残されない。黄巾後はある程度ましになったらしい。

荊州の郡

・南陽郡

戸数 : 528551

人口 : 2439618

1戸の平均人口比 : 4.6

県数	： 37
県平均人口	： 65900
郡治	： 宛

各人物の作者のイメージを

劉表

正史では八俊に入る清流派のエリートだがなぜか党錮の禁から生き残っていた人。督三州事（蔡中郎將集では都督揚荊益交四州事）になっっていたりしている。

孫家には3代に渡って命を狙われ、曹操は事あるごとに攻撃してくるし、当時ただの傭兵隊長だった劉備からは贅肉付いていたから戦争したいとわがままを言われたりと三国志の英雄に散々いじめられ、胃が痛くなりそうな人生を送った。

長沙郡、南郡、南陽郡は占拠され零陵郡、桂陽郡、江夏郡では黄巾後も叛乱が起き、さらに袁術と孫堅の悪政で荒れて居た上に落ち着いてきたら孫策が曹操・董承・劉璋と協同して劉表に攻撃し、益州、揚州、豫州に加え荊州南部の蜂起と全方面包囲という無理ゲー状態から荊州を守り抜き、10年かけずに天下の要地にした。

蒯良、蒯越、伊籍、向朗、霍峻、頼恭、黄忠、文聘、李厳、呉巨などの人材を用いたりしたが劉備の進言を受け入れないだけで猜疑心が強く人材を用い得無いにされたかわいそうな人。コーエーで96あつた魅力が81になり73あつた武力が31になったりほとんど酷い扱いに…

劉鎮南碑という劉表の善政をたたえた石碑がある。劉表の遺体を故

郷の？州に送り届けるため、日ごろ劉表の世話になっていた人々が私財をなげうつて資金を調達したという。

魯肅

天下二分の計を初め非常に野心的で大胆すぎる提案ばかりするので死ぬまで孫権や周りと意見が合わず、煙たがられ、孫権が魯肅の話を聞くとき、周りに人を置かなかった。有名な赤壁のときの行動も独断で劉備陣営に交渉しに行ったりと孫権の命を受けずに勝手に動いた。孫権は魯肅の子孫ではなくて、後任者に爵位と奉邑を渡している。諸葛亮も周瑜も孫権さえも手玉に取った孤高の参謀兼外交官。

萌越

何進の補佐をしていたがさっさと見限って荊州に帰った。そうしたら今度は劉表がスカウトに来て邪魔な豪族55人をぶっ殺す策を与えたり参謀として働いた。劉表の頭脳。荊州を制圧したとき曹操は萌越が下つたと聞いて荊州を得た事よりうれしいと言ったらしい。その後九卿の座に就くが数年で死亡。

萌良

劉表が訪ねて来た時しか出番がない。演技では大活躍

蔡瑁

劉表生存時は江夏・南郡・章陵太守、鎮南將軍軍師を勤めた。曹操と幼なじみで降伏後従事中郎、司馬、長水校尉、漢陽亭侯となる。小舟を加えれば1万艘の水軍を操れる名将なのだが、ぶっちゃけ出番がない。横山三国志ではただの悪役だし…司馬徽や徐庶と家が近所だそうです。あと孔明と親戚です。

文聘

劉表生存時は北方の曹操からの防衛を任された。劉表死後、曹操に降伏。関羽を楽進と共に敗走させたり、孫権軍5万を2千でフルぼっこにしたりとチート気味な能力を発揮。清潔・質素を旨とし、威厳と恩恵が有り、部下や民からは慕われ、政治面でも優秀であった。武勇や智謀は轟きわたり、呉は士気が上がらず、侵攻することができなくなつたという。張遼と並ぶ呉キラーの一人。

黄祖

孫堅を初め、徐？や？操などの呉の名将や勇将を殺しても殺しても流れ矢での死になつてしまふ人。呉が10万ともいわれる太蜂起がおきるほどの軍拡をしても落せなかつたのに敗将扱いの人。4方面に戦線を持つていてろくに援軍が来ないから1太守が一国の戦力しかも将が孫瑜・周瑜・程普・黄蓋・韓当・呂蒙・董襲・周泰・虞翻・徐？などのチートで軍拡しまくつた孫呉と戦わなければならぬ無理ゲー状態で10年近くも耐えた人。孫家は戦いには勝つても最後まで黄祖が守る江夏郡を取れなかつた。

孫嵩

十常侍に喧嘩売つて命を狙われ逃亡中の趙岐を匿い名声を得た。その後青州刺史に推挙され、大飢饉に襲われると荊州へ疎開し劉表に重用された。劉表は賢人として礼遇した孫嵩殿の縁者の孫乾が来たことを喜び、劉備の受け入れを承諾したとか

霍峻

兄・霍篤の死後、劉表の命により霍峻がその私兵を受け継いだ。劉表が死ぬと劉備に帰順。数百の軍勢で扶禁・向存ら一万余人の軍勢を破つた。その功績により梓潼太守兼裨將軍に任じられたがすぐに

死亡した。

李厳

劉表に取り立てられ、郡県の長をいくつか務めた人。劉璋に身を寄せたあと劉備に投降し法正死後、尚書令・中都護になる。その後庶民に戻され、李厳が居なくなつてからは益州人士は諸葛亮を中心とする荊州人士社会に組み込まれて一つになつたらしい。法正の派閥を継いだ人と言われているので孔明との権力闘争に敗れたとの考察も。演義では黄忠と互角に戦つたり陸遜と互角の人物と評されたりとやたらとハイスペック

孫乾

劉備のお使い担当。スーパー外交官。孫乾伝は最短ということでも有名。北海孫氏が夏侯嬰の直系の子孫であつたという説もあり、幅広い人脈を抱えていたと思われる。

廖立

？統と並ぶ良才と呼ばれたが諸葛亮は地位くれとうるさいし、人事で文句を言う廖立を死刑にしようとするが劉禅は流刑にすることにした。諸葛亮ならばいずれ自分を復帰させてくれると信じたが諸葛亮が死んでしまったのでそのまま農民生活。

潘濬

劉表に召し出され江夏郡の従事となり厳格な法の適用したため郡を挙げて従うようになった。

その後劉備に仕え信用されたが関羽からは嫌われた。その後関羽が死に荊州にいた劉備配下の部将や役人のほとんどは孫権に帰順したが出頭を拒否。孫権は潘濬を寝台にくくり付けて連れてこさせ説得してようやく心服させることができた。その後荊州の軍事と治中を

兼任し、信賞必罰をもって軍規を徹底した。

王儁

曹操の親友で劉表に「曹操は天下とるから降伏しろよ」と言っ
て拒否された人。献帝から尚書として召されても無視した。陰ながら常に、曹操の評判を高め続けた。

劉磐

劉表の甥っ子で黄忠と共に長沙を守備。孫呉水軍を寄せ付け
ない荊州東部の要として働いた勇猛な武將。
任地で反乱が無かったことから政治能力もあつたと思われ
る。

伊籍

劉表と同郷の人物であり、若い頃から劉表に仕えていた。劉
表死後、劉備に仕え蜀科を制定や馬良の推挙、的盧の助言など
内政面での実績は多く、外交官としての才もあつた人物。

陳震

劉備が荊州の牧となつたとき、従事として招かれ、その家臣
となり、諸郡の管理を掌つた。劉禅の代には尚書令となつた。
孫権が皇帝になつた時に会盟し、「呉は徐州、豫州、幽州、青
州、蜀は并州、涼州、冀州、？州を」と天下を分配するこ
とを誓約し合つた。

劉焉

地方の事態を面倒くさがる霊帝に州牧制をやれば財布痛め
ずに治まりますよとか言っ
て認めさせた人。益州の有力者を味方に付けて反乱を抑えた後、その有力者滅ぼして統治。その統治能力は極めて高く民に慕われた。諸侯が反董卓に立ち上がったもスルー。そんなの

関係ねえと劉邦のように栈道を焼き払って無視した。

劉虞

公正清廉な人物であり、名士や人民などに人望があつた皇帝候補。劉虞を慕い100万もの人が移民してきたとかいう人気ぶりで烏桓でも人望が厚かつたため戦わずして帰順という今まで苦労してたのはなんだつたんだと感じるくらいすんなり治まった。この功績で劉虞は大司馬に昇進している。朝廷が劉虞を督六州事にして6州をまとめてもらおうとしていたほど期待されていた人物。略奪を繰り返す公孫？を攻撃。公孫？が民衆を盾にして城に立て籠もつたら、人を傷つけないようにと無茶ぶりして攻めあぐねて居た所に火攻めを仕掛けられて捕まり処刑された。

劉宏（靈帝）

皇族の子供の中で最も賢いとされ皇帝になった。鴻都門學を創設し、鴻都門生を地方で刺史や太守にしていたり、皇帝直属の部隊である「西園軍」を創設している。宦官の傀儡ではなかったと思われる。西園軍を作るために売官や売爵をしたために地方が荒れた。この西園軍を維持するために董卓は墓荒らしや略奪、貨幣鑄造を行ったとの見解もあり、いろいろと爆弾を残してこの世を去つた。豪族が貨幣を寡占していることを憂い、売官によって貨幣を吐き出させ、改鑄して流通量を増やした為に貨幣寡占で小農民を支配する豪族に嫌われ、士大夫を用いないで宦官や士大夫が認めない官僚を用いた為、酷い扱いになつたとか…本気を出す前に死んだ人との意見もちらほら

第13話 誅滅

荊州全土に人を派わして、州牧の劉表が区星討伐の為に兵を集める。対象は主に江夏派閥と言われる今荊州でもっとも力を持った勢力。これは州牧という皇帝に荊州の軍事、政治の全てを任された人間がこちらの派閥につき荊州の重鎮に迎え入れる為のものでもう一つの長沙派閥の者は荊州から追い出されるであろうと噂が流れた。

劉表といえは政治家や学者として名声は高いが武勇の方は自信がないと見える。区星ごとき雑魚に全土から人を集めるとは。まあこちらの勝ちが決まっているのだ。ならこの召集は今後の荊州の地位を決めるために我らの力を試すつもりかと武力自慢の各地の豪族の首領たちが手勢を引き連れて、続々と襄陽に集まって来た。

やがて兵力を城外に留め置くと、飾られた式場に入った首領達は一同席に着く。

一同席に着くや、完全武装の蔡瑁の手勢が首領達を取り囲んで武装解除する。

「動くな!!」

蔡瑁が叫ぶ。

訳が解らずオドオドして居る首領達の前に崩越と魯肅を引き連れた軍装の劉表が現れ崩越が、大声を発した。

「これより州牧様の、重大な御命令が発せられる。心して拝聴せよ」

劉表が刀を抜き放ち

「斬り捨てる！！！！」

と命を發した瞬間蔡瑁の手勢が、一斉に首領達に襲い掛かり豪族達はその場で全員斬殺され血の海と化した。

「う、これは姉さんには見せらんねえですね。」

萌越が顔を青くしながら感想を漏らす。

「ここからが重要なんだよ。城外に居る連中にこのまま事実を告げれば暴発するかもしれないなあ。」

劉表の気楽そうにそう言った。

「……はあ、楽しんでませんかこの状況。」

「菖蒲にそう見えるんなら成功だな。ここからは不安とか緊張とかを見せないようにしなきゃいけないからな。この状況を楽しんでるいかれた將軍ぐらいでちょうどいいだろ。」

「まったくこいつの頭の中はどうなってやがるんですか？こんなふざけた状態で軍を率いるなんて普通あり得ねえですよ。」

「いつものことです。気にしてはこの人に付いていきませんよ。」

「…苦労してそうですねあんた。」

「ええ、いつもとつぴょうしのない事しでかしますからね。こつちに相談なく。何度殺そうと思った事か。ふふふ」

「ちよつと待て！嘘だよ。というか俺命狙われてたの？」

「…人を置いて行つたと思つたら謀殺の手伝いしろと言い出すし、今度は豪族の首領殺したあとに軍率いて討伐しに行くですか。これで殺意が芽生えない方がおかしいと思います。」

「ちよつと武器押しつけるのやめてくれ！俺が弱いのは知ってるだろ。」

「ええ、だからこつして流れ矢に当たつて死にそうなのだが無茶をしないようにこつして…」

「すまん、喧嘩は後にしてくれないか？」

蔡瑁が胃を抑えながら声をかけた。

「じゃあ薊が目を付けた奴と俺が目を付けた奴呼んで来てくれ。すぐ。」

「わかつたよ。待っててくれ。」

そのころ襄陽城前で金色の髪と深緑の瞳を持つ少女が溜息をついていた。

文聘 side

我々は民を守るために武器を持ったのではないのか？

ならなぜこんなところで権力争いなどをしなければならぬのだ。

「おい、嬢ちゃん。」

「…なんですか？孫嵩殿」

熊の様な容姿に連接棍棒

勇侠の士孫賓碩。十常侍に喧嘩売ったと聞くが…

「血の匂いがするぜ。劉表の野郎何かやりやがったな。これから覚悟しておいた方がいいぜ。」

「劉表殿は我らが主となられるお方。呼び捨てにするのはいかがかと。」

「さつきまで不満げな顔してたくせに。俺はうちの若い奴らを食わせてやるためにここに来ただけだ。別に嬢ちゃんみたいに戦う理由なんか求めちゃいないのさ」

「っ…」

「お、なんでわかったかって顔だな。若いっていいな。」

「か、からかわないでいただきたい！」

誰かこちらに向かってくる。あれは蔡瑁殿か…

「孫嵩殿、文聘殿。劉鎮南將軍があなた方を呼んでいる。ついて来てくれないか？」

孫嵩殿がさつきまで上機嫌だったが蔡瑁殿が現れた瞬間急に機嫌が悪くなった

「ふん、お前がここにいて事は劉表はお前らに付いたってわけか。つまらねえな。」

なるほど、長沙派閥に付き江夏派閥を殲滅し、我らを懐柔するつもりか。

たしかに荊州をひとつにするにはいい手だと思つが…

「はあ…それならよかつたんだがな。」

「ん、どういつ事だよ？」

「いや、話中だ。来てくれるか？」

「わかりました。」

「いいぜ。行ってやるうじゃねえか。」

第14話 権欲(前書き)

お気に入りか600を超えてました…何があったんだろう？

第14話 権欲

文聘 side

血の海と化した襄陽にて後任者を発令する声がしていた。

「……零陵太守に霍峻殿、武陵太守に李嚴殿、江夏太守に文聘殿以上だ。」

大抜擢され、郡や県の長に、突如、大出世する事となった者は私を含め皆畏怖、恐懼した。

目の前にはかつての上司の死体。貪欲で乱暴な者達だった。民を貪り蓄財ばかりしていた。

しかし、彼らを殺せば後任がいなくなり国が荒れる。

それを前任者を一同に集めておいて、全員を誅滅し、新たに後任者を発令するなんて方法で回避しようなど…しかも荊州の半分を任せるなど正気の沙汰とは思えない。

「ちよつといいかい。」

孫嵩殿が劉表殿に声をかける。そういえばこの人だけ役職がない。

「なんですか？」

「俺だけ役職がないんだが、忘れてたのかい？」

「あなたは孫嵩殿ですね。私はあなたが与えられた役職で満足するとは思っていません。この後の区星討伐の功にて地位を決めたいと思っっています。望まれるのであれば太守の地位ならかまいませんが

「どうぞしょうっ？」

「…いいぜそのいかれっぷり。いらねえよ。俺に太守なんて出来るわけねえしな。で、区星討伐ってのはいつやるんだ？」

「そうですね。明日にでも長沙に向かいたいと思います。その為に集まっていたいただいたのですし、そしてその為の準備をしておいてもらえるように皆さんにお願いしたので。」

「無茶な！」

「この後すぐにか？」

「無謀すぎるぞ。」

周りから批判の声が上がった。たしかに無謀だ。ただでさえ統率のとれていない私兵の集まりなのだ。相手は賊で練度も低いだろうが数は多い。こちらも大きな被害が出てしまう。

「無茶は承知の上です」

「ならば」

「ならばどうします。このまま長沙の民と見捨てると？知つての通り零陵、桂陽、長沙は劉長沙国が解体されて郡として別れた物。このままでは手をこまねいては旧劉長沙国の領土は奪われますよ。それだけの大勢力となったら手がつけられなくなりますか…」

「そ、それは…」

「納得がいかないと云うのなら出て行ってもらって結構です。代わ

りの人と呼ばせていただく。私が求めているのは迅速に行動し、被害を最低限に抑える事が出来る人材です。」

われらのような寒門出のものでは普通に出世していけば県令の地位が限界。それに対して名家は辟召を繰り返して、すぐに高い地位に上がってしまう。我々はそうして高官になったものに媚を売り、お情けで出世をするしかない。こんな理不尽があつてたまるか。

…しかしどういふ事だ。討伐に行く前に地位を確約する意味がないだろう。私達がそれに感謝するとも思っているのか。ありえない……そういうことが。私たちは試されているのだ。目の前にあるかつての上司のように権力で人を釣る者が釣られるものかどうかどうかを試されている。与えられた地位で満足し精進を怠る人物かどうか確かめる気だろう。この人選はおそらく崩越のものだろう。それを自分の目で確かめる。孫嵩殿が除かれたのは十常侍に喧嘩を吹っ掛けるような人物ならば権力に酔うような人間ではないと判断した。権力を欲しがらるなら彼らに媚を売った方が百倍いい。それと自分が何を求めているのか私達への手掛かりとしての意もあつたのかもしれない。

「劉表殿！」

「どうしましたか文聘殿？」

「私も与えられた役職に興味はありません。孫嵩殿と同じで区星討伐の功にて地位を決めていただきたい！」

「…了承しました。」

「わ、私もだ。」

「私も…」

次々と

皆も権力や欲で釣られるような人間ではないと言いたいのであろう。それにそのような人物をここに呼ぶわけがない。権力や欲につられる人物が先ほどまでいたのだ。そんな人物を求めているなら殺してなどいないはず。

「…分かりました。では明日の朝には進軍を開始します。準備に取り掛かってください。」

劉表 side

うーん、みんな欲がないなあ。

確かに欲がなさそうな人物選んだんだけど、ここまでとは…

はつきり言って区星討伐はそんなに功績の挙げられる戦いにならないんだがどうしようか？

まともに戦っても普通に勝ちそうだし…

孫堅、曹操四天王とかとガチでやりあった武将とかばかり選んで、しかも数も有利。

いや、油断したらダメだろう相手は多分恋姫の孫堅殺した奴。じゃなきゃ袁術の所にいないだろ…たぶん

それにしても集まった人たちが個性的すぎる

孫嵩のおっさんとか熊みたいで怖いんだが実力主義のプロパガンダとしてこれ以上の人はいないし、荊州は猛将タイプが少なすぎる。なんでこんなにいるんだよ。まだ俺何もしてないぞ。

文聘なんてどこの腹ペコ王だよって突っ込みたかった。アホ毛が考

え事していた時動いていたんだがあれどうなってんだろっ？
俺にこの人たち扱いきれるんだろっか。

第14話 権欲（後書き）

キャラの容姿考えるのがめんど…原作キャラ使いたいなあ。

第15話 保身(前書き)

なんか戦闘シーンがうまくいかないのなんでこんなことしてるの
かの理由その2を…花粉症でやる気が出ないです><

第15話 保身

劉表がなんで豪族に喧嘩売るなんて命を削る様な事しているのはもちろん保身のためである。

荊州の南陽郡は光武帝中興以来優遇されてきた郡で、戸数は五十三万（赤壁まえの荊州全体の戸数は70万程）、人口240万、その郡城である宛は周囲三十六里を数える大城。

疑問は軍事力の弱体な所を狙い撃ちし、そこを核に戦力を整え、中央との連絡を断ちきられて動揺する郡守たちを順次潰してゆくとしていた黄巾がなぜ真つ先に南陽狙ったのはなぜかという事。地勢を見れば明かなのだが宛を押さえた上で、旧楚の長城遺構に拠れば三十を越える諸都市が孤立するのである。1つ落とせば 三六の郡ゲツトできるといってこのメタルキングだよ（倒しにくいけど倒したらすごい的な意味で）と突っ込みが入りそんな特殊な場所なのだ。黄巾は善政してようが悪政してようが宛は狙うだろう。

黄巾賊の初期戦略は先ず中央と地方の連携を断ちきるように蜂起している。荊州の宛なくして包囲網が完成しないし、黄巾の革命は成功しないのである。実際この南陽だけでも神上使の張曼成が敗れた後にも、趙弘、韓忠、孫夏などの黄巾の将が現れて10万を超える軍勢を率いている。この南陽をどれだけ重要視しているかわかるだろう。そして旧楚の長城遺構には穴があった。葉・堵陽・博望を結ぶラインからの侵攻が容易なのだ。曹操も劉表との間で荊州北部を争った際にはいつもこのルートで争っている。

いつ起きるかもしれない黄巾に対して、贅沢ばかりして問題を起す豪族の世話なんてしてらんねえよ。そんなことしてる暇あったら旧楚の長城遺構の穴どうにかしてるわ！と劉表は語る。

そして黄巾の怖いところはその道教思考にある。儒家規範による人材登用が結局の所、名門が名門を引き立てる階級社会になり人材登用の公平性が保たれていない事を解消するものとしても思想基盤を革命を狙ったというものもある。人材登用の公平性が保たれば優秀な人間が上に行く事になる。

つまり、実力があるが寒門出のせいで出世できない優秀な士大夫が黄巾の乱に参加してくる可能性があるのである。それを恐れた皇甫嵩、呂強らが霊帝に党錮の禁を解除しなければ党人が多数黄巾賊に寝返ると訴えた理由である。あほな豪族引き連れて戦って優秀な奴らに勝てると思うほど劉表は自信過剰でない。20万を超える軍勢を指揮できるだけの才を持った者と蓄財に精を出す豪族では相手にもならないだろう。相手では黄巾の乱は民衆の不満が爆発したものの不満を増やすことしかしねえ奴らがいたら後ろから民衆が黄巾賊に早変わりなんて事態にもなりそうだ。隣の揚州の黄巾率はやばいし、山越というのまでいるのである。彼らが隣に流れてきたらどうすんだよ。北は黄巾祭りだし、まさに死亡フラグ全開。ここで優秀な將軍を懐柔しとかないとマジでやばいのである。

そして言いかえれば黄巾の乱前は寒門出のせいで出世できない優秀な士大夫が野に散らばってる状態。こういう優秀な人はだいたい豪族が抑えてしまうのだがまだ第2次党錮の禁から少ししか経ってない。自分の上司のとはっちくりらった優秀な人たちが結構いる。歴史上に名を残した人もそこそ居て、家柄にこだわらず実力を発揮できる所を、そして家族を匿うことを条件に来てくれる人がいるのでこっちの人たちの方がいいやという割りきりである。

一番大きいのは名声である。民衆に人気あるものはなかなか殺せないのである。例を言えば劉璋だろうか？劉璋は民には人気があった。

董和を重用した為異民族との争いがなくなり、臣の意見を孫を可愛がる爺さんのごとくよく聞いて実行するから善政していたといえる。一方「魏書」によれば劉備は「劉璋の野郎、駐屯地でこんなにおれたちが頑張ってるのに（だからだらしてただけ）、自分だけはいい思いでやがる（兄が精神病であわてるよ）。1万人を援軍してくれないと足りないのに、5千人もケチりやがった。劉璋、殺してやるうぜ。」とかいって武將殺して兵奪って野山を焼いたり、人殺しまわってた。そこに儒教社会でタブーの父親殺しの马超が劉備頑張れと応援に来てる状態である。∴これで善政してた劉璋殺してたら恐怖から黄巾の乱再来のような状態になっただろう。

できればこいつを殺すと民が暴れるからやめようくらいの名声がある。その為には優秀な人を…

「とりあえず名声を得ることと公平な登用制度を作らないとダメだな身の安全のために」という結論に至り、今日も頑張ってる劉表であつた。

第16話 霹靂（前書き）

長い事放置してすみません><
また短いですが…

正史で区星さん天子名乗ってたんですね。ずっと自称將軍（笑）か
と思ってました。天子（笑）だったとは…

第16話 霹靂

（長沙城）

「い、皇帝陛下！」

慌てた様子で部屋に入ってくる

「なんだ？」

皇帝と呼ばれて上機嫌なのか区星は笑顔で答える

「漢王朝が我らに3万を超える征伐軍を差し向けてきました！」

「なに！」

楊奉が驚き、何か言おうとした瞬間

「征伐などと言つな！懲罰を受けるべきは奴らであり我々がそれを行つ立場なのだ！！」

周朝が顔を真っ赤にして伝令を怒る。

「ははは、そうだな。で、どうするか？」

区星は問う。

「籠城しかありませんね。」
と郭石が言う。

「皇帝足るもの座したまま相手を迎え入れてやる。」

劉表 side

「斥候からの報告によると相手は籠城するそうですね。何考えてんでしょこいつら」
と崩越が報告してきた。

「—安心つてとこですか？」

菖蒲が問う。

「ああ、最悪の場合、長沙郡、零陵郡、桂陽郡の蜂起を想定していただだけにこの選択はありがたい。その場合は臨湘で戦うようにしむけるだったが変更だな。」

区星お前籠城しちゃだめだろ…

籠城は指揮するのも兵の士気を保つのも名将であつても難しい。さらに賊を仕切るものの怖いところはオルグの才に優れているものが多いことだ。

役人への不満を持つものを集めて他郡へ行き数を増やすのが一番厄介だった。これがないとなると怖くない。というより区星はここまですで満足してしまったという事かな…

「長沙城門前を制圧し、区星の注意をひく！文聘と霍峻の率いる部隊に裏門を任せる。」

「はっ、」

〈長沙城・裏門〉

ヒューー　ズズーン

「な？なんだ落雷……！？」

「地震かなにかじゃないか？見て来い！！」

そこには飛来して来る巨岩を浴びてつぶれた仲間と壊された城門があり、飛来して来る巨岩が大気を引き裂く唸りを挙げながら目の前に落ちてきた。それを見た瞬間、驚天動地の阿鼻地獄となった。

劉表が作っていたのは霹靂車（巨大投石機）である。それもただの投石機ではなく2重の振り切り動作の連動によって振り出しの初速を倍にした物で直接石を乗せるのでは無くしなりを加えたりと手の込んだものだった。もちろん準備不足のため照準調整は甘いが狙いは櫓や高楼ではなく門や壁であるので問題ない。

「にげるー！ー！！」

「岩が飛んでくるぞー！ー！！」

そんな混乱を見た部隊は好機とみて突撃してゆく。

混乱に乗じて裏門の守備を任されていた区星の將の楊奉・周朝は混乱に乗じて突撃してきた文聘や霍峻の部隊に討たれ、残党は正反対の方角に逃げて行った。

〈長沙城・正門前〉

「どつしてこうなった。」

区星は己の不幸を嘆いていた。

兵は收拾がつかず、裏門の方から逃げてきたものは1秒でも早く恐怖の対象から逃げ出そうと「早く開ける。」と怒鳴り散らし、制止を聞かず無理やり門を開け、弓隊によつて殺されていた。

その後逃げようとしたが周囲の混乱によつてそんな事も出来ずただ立ち尽くしていた。

「よう、区星さんよ。良い夢は見れたか？」

孫嵩が問いかける。そして区星が答える間もなく

「おおおおおおおおつ！！」

と大気を揺るがす咆哮と共に柄を持ち振り回して叩きつけることで継手を軸として加速された一撃が区星に叩きつけられる。その後孫嵩の繰り出す棍を受け切れなくなる。衝撃に耐えられなくなつてきていたのだ。そして十合目、孫嵩の振るつた棍に区星は星球式鎚矛を弾き飛ばされてしまった。

その隙をついての棍が区星に叩きつけられ。区星はミンチになった。

区星の王朝は長沙から消えた。

第16話 霹靂（後書き）

やはりバトル物は難しい><

第17話 現状（前書き）

現在の荊州の主な地位

荊州牧：劉表（荊州治府：宛）

荊州牧補佐：魯肅

「南陽郡」 太守：蒯良 丞：蒯越

「南郡」 太守：蔡瑁 丞：孫乾

「零陵郡」 太守：霍峻 丞：廖立

「長沙郡」 太守：黃祖 丞：潘濬

「武陵郡」 太守：李嚴 丞：王儁

「章陵郡」 太守：劉磐 丞：伊籍

「江夏郡」 太守：文聘 丞：陳震

客將：孫嵩

なんか疑問点になりそうな所の言い訳

Q、州牧は太守の任命権ないよ。州牧は政務の監察に軍令違反者に対する処分の権限と軍隊を監督する役職をくつつけたような役職だ。
A、ご都合主義です。正史の劉表もやってたんでいいかな。とぶっちゃけ州牧としての仕事だけだと内政出来ないの…

Q、なんでいきなり鎮南將軍になってるの？

A、裏設定ですが太学をトップで卒業し郎中となり（太学の成績優秀者は郎中として登用されてました。）その後幕僚なんかになりして経験を積んでその後洛陽令から太守就任という超エリートコース突っ走ってますので一応いきなりではないです。それでもめちゃくちゃ飛んでますが…ぶっちゃけ交州と荊州、揚州は異民族との争いが酷いのでそれを押しつけられたと考えれば…

Q、本拠地は襄陽じゃないの？

A、もともと荊州治府は南陽です。劉表が来たときは袁術に邪魔されて入れなく、取り返した後も曹操に近すぎるため宛はやめようと襄陽に拠点を移しました。襄陽は南郡なので蔡瑁の拠点となっています。南方からの勢力浸透を漢水を盾にして防ぐことができる樊城は南からの攻撃に弱い荊州の最後の砦とでもいうべき場所ですがあくまで軍事的な面で重要なのであって政治の中心はやはり南陽盆地と言われる肥沃な土地と漢三大都市の一つの宛がある南陽郡だろうということであって宛を本拠地にしました。

Q、なんで孫嵩なんてwikiにも出てこないキャラ出したの？

A、孫乾を家臣団に入れたかったからです。

この話はハードル上げすぎた感じがちょっとあります。

天下三分か天下二分で解決！という恋姫のラストでいくと魏の屯田民入れて把握人口が三国合わせて1600万人。残りの4000万人何処行つた状態になりそう。

第17話 現状

後漢がなぜ滅んだのか。悪政のせい？もちろんそれもある。しかし大まかな後漢の滅亡の流れは豪族の伸長によつて豪族に隷属する小作人の割合が増えることで、徴税できないのと同時に豪族の不法行為への対応ができなくなり、さらに割合が増えていき公共事業が出来なくなる。これにより洪水などが起こりやすくなり土地を失う農民が増えて小作人の割合がさらに増える。そうなれば取り立てられる税の量が少なくなること、官吏の給与が満額払い難くなり、地方官吏の腐敗を招く。といったようにどんどん悪循環していき、靈帝様が金がないので売官したら今までは豪族同士の抗争が、県の長官の人事にそのまま反映していて、地元なので反乱がおきない範囲で徴税してたのが一か月で地元帰るからここがどうなつても知らないとばかりに限界まで取り立てるようになり税を払い切れずに土地を売却する事になったものと、党錮の禁で中央での栄達をあきらめそこそこの地位を得ようと豪族になるものが大量発生したのでそれと同時に土地を奪われたものが小作人になる事態になった。しかもこの時代は毎年のように異常気象がおきてるから、その搾取に耐え切れなくなり黄巾の乱の発生。それによりさらに徴税能力が下がり、一州の人口は三分の一、四分の一になり、さらに悪循環に、儒教の考えでは天候とかが悪いのは皇帝のせいだから漢王朝の権威は下がり、董卓の暴走で乱世発生。さらに飢える人が出てきて15歳で老人な平均寿命20歳の時代の到来で国が管理している人口が5648万人だったが三国合わせて700万強になり、その人口による税は戦争に使われる時代になる。そうなつたら権威もくそもなくなり消滅：ホントにやばい時代だな。というかも漢王朝詰んでるとかそういう次元の話じゃないな。

と、いうことで自分ではどうにもならないんで現代知識でチートな

人材をゲットしてどうにかしてもらおうとしたら…

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

「人材チートしようと思ったら皆赤ちゃんだった。」

な…何を言ってるのか わからねーと思うが

おれも何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…

催眠術だとか超スピードだとか

そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

人材チートの大本命の鳳雛と呼ばれた？統、臥龍と呼ばれた諸葛亮の厨二ネーム2名に加え崔州平、徐庶、劉巴、孟建、向朗、尹默、李言選、石韜、馬良など皆赤ちゃんだった。

なにこれ、新手的いじめ？いつの間になら赤ちゃんハンターに…

しょうがないので普通に足りない分は太学からパクる事にした。

洛陽にはいくつか派閥がある。梁冀派、桓帝派、陳蕃派、曹節派、皇帝派など様々だ。

この皇帝派は鴻都門生という皇帝が作った学校の卒業生の様なもので地方で刺史や太守に、中央で尚書や侍中などの役職に就き爵を貰っている。これにもっとも嫌悪感をしめしたのが陳蕃派である。陳蕃派とは太学生を使えと言っている儒学者のグループで。簡単に言えば皇帝に「お前が失政や悪徳してるから洪水とか飢饉おきんだよ さっさと宦官やお前が趣味で作った学校の卒業生使っくんじゃなくて太学生使え。」と言ってる。だが皇帝は聞かないので太学生が高官に就職できない。

状況としては新旧の宦官派と新旧太学派、濁流と清流との戦いに皇帝が混ざったという事になる。そうなるともっとも困るのが太学派である。太常や郡太守の推薦、もしくは三百石以上の高官の子弟でなければ入学する事が出来ず、難しい試験を乗り越え、一般家庭の年収の二倍のお金を毎年払い、成績が良くなければ退学。宦官に目の敵にされながら努力していたら高官の地位が皇帝の作る学校の生徒に取られている。とかいう状態だ。優秀なのに下級役人スタートのものが続出した。

そんな優秀なのに地位を得ていないなんておいしい人材を逃すなんてもったいないことしないだろ。少なくとも俺はしない。

「よし、最近太学を卒業した奴を中心にヘッドハントするぞ。」

とりあえず宣言しておこう。人材が足りないんだ。これ以上は死ぬ。何代目かしらんがフランスの王様が睡眠は3時間取れば十分とかほざいてたが、そんなことしてたら体壊すわ。

「はあ？へつどはんとですか？」

まただよこいつと菅蒲があきたような目で見てくる。いつまで経ってもカタカナが抜けないからこつという事はしょっちゅうあるのでなれたのか？

「今、皇帝が太学から鴻都門生に浮気してるからその影響で就職に失敗した太学生に声をかけよう。」

「そりゃいいですね。こつちにも利がありますしね。」

なんか萌越が俺を肯定するなんて怖いんだが…

「教養よし、勢力よし、収入よしのよいうわさを流せば二流〜三流の文人は勝手にこつち来たがるんで、各地に散った文人は自分の有用さを示すために手紙を出すから文人による諜報網を構築できるので、そいつらから来た手紙は渡してください。こつちで調整するんで」

…に、忍者部隊の夢が崩れた。なんじゃそりゃ。えげつねえ。

荊州の統治は非常に難しい。荊州は開拓の盛んな地域として灌漑水路が増築されつつあるが、そのためかえって洪水が増えている。洪水で自分の田畑がなくなり豪族の小作人となるものが増える。それを阻止するためには治水を行う必要があるが、現状全然そんなことしてない。労働を課すわけだから民衆の気は下がり、治水のノウハウを持つてる人が少ないから苦労する事必死。でもしないわけにはいかない。前漢が滅んだ原因の一つに治水を怠ったことにより中国古代専制主義を支えた斉民制が崩れたことが挙げられるからだ。黄河は明帝の大治水工事によりこれからでも700年間は水害から守られるから良いけど長江や漢水はそこまで整備されていない。災異説という言葉を知っているだろうか？主の失政や悪徳に対して天が譴責したものだと言う儒学の考えだ。この理屈だと皇帝の徳が高けりゃ災害なんて起きないわけだめなら皇帝を変えればいいので治水の技術を持つてる人が育たない。荊州の特徴は何と言っても川だ。筑水、漢水、丹水、湘水、？水、？水など多くの川があるが後漢の明帝以来ほとんど治水がされていない。

三公の座に土木関連や治水の役職もあったが無くなってるし、一から育てなきゃならない。開拓にこれ以上適した土地はないのだが光

武帝・明帝の隠密を駆使した厳しい官吏指導の時代がすぎると本当に何もやらなくなつたからまじでやる事が多すぎる。荊州は黄巾の後も4つの郡で反乱起きてるし…

さらに異民族の懐柔か。これ失敗すると孫呉みたいになる。あの状態はやばい。

もともと荊州は楚と言われる46代続いた大国の領土で漢民族形成の母体となつた黄河文明系の諸民族とは異質な、長江文明の流れを汲む南方の民族で、それが長い年月をかけて漢民族と混交していったものだ。だから漢民族でない異民族も結構いて、異民族との関係が悪化すると統治が難しくなる。

孫家は異民族の扱いで失敗している。孫家は黄祖討伐に失敗した後、何度も山越狩りをして人員・兵員を補強している。

だが山越としてはたまつたもんじゃないわけだ。使者出しても殺されるし、いきなり、新米将校の力量を試す練習場として扱われ、暮らしていた所をいきなり襲われて武將の報償として渡されて、渡された相手が悪ければ奴隷みたいな生活になり、毎年のように死んでこいと戦場に行かされる。孫呉は黄祖に何度も挑み結局江夏郡を取れずまた山越狩りをして人員・兵員を補強なんてことを繰り返し、やっと勝てそうと言う時になって塗炭の苦しみを強制された山越の人たちも耐えきれなくなり揚州で大規模の反乱を起こされ孫家は武將全員使つて鎮圧。

黄蓋なんて9か所を盪回しにされ、結局孫呉は5年も動けなくなつた。この無理やり連れてきて奴隷扱いというのだけはないな。孫呉は滅ぶまでこの問題を解決出来なかつたし…

有名な孔明の七度捕らえて七度放つは予算的な問題でやりたくない、俺の器の大きさに心服なんて自分で言っていて恥ずかしくなるような事成功しそうにないし、そんな器じゃないのはわかつてる。異民族差別やりたいわけじゃないし。というか人集めたいならそんなこととするより河北の棄民の吸収した方が手っ取り早い。無難に食糧渡

して和解する方向でいいか。

軍動かすのお金かかるし、戦場に何度も行きたくない
秩序？儒教？漢民族の誇り？知った事か優秀な奴拾ってこないところ
うちの身が持たないし…
なんなんだよこの詰みゲー状態は、いいじゃん。悪の宦官や不正官僚を倒してみんな幸せハーレムエンドで。

余談

劉表が頭を生ませている時に劉焉は利権を約束して有力者を味方に付けて反乱を抑えた後、その有力者を滅ぼし、益州をほぼ自分の物にしていた。もちろん長年務めた人脈を生かし洛陽から優秀な人材を引き抜いて人材面は盤石である。異常気象の影響は少ないので収穫量は高く、荊州の劉表に恩を売っているので益州の特産物である塩と米の荊州経由の販路があり、巨額の利が期待される。益州は文明化が完了していて、安全。ついでに飯もうまい。さらに連絡取りずらいので賊のせいで、道路が遮断されてしまいましたとか言えば独立完了。諸侯が攻めてきても最大で70万は動員できるので守勢に回ればよほどの愚将でなければ墮ちない。さらに面倒事があれば洛陽に近い劉表が動く事になるのであまり軍事に金を使う必要がなく、内政にはほぼ100%の力を注ぐ事が出来るので民衆からの支持は高く、劉焉は皇帝気分を存分に満喫していた。

第17話 現状（後書き）

修正、孫呉みたいになるの理由を追加
孫家の山越狩りの話を見て

「ねえ祭、どっちが山越多く狩れるか競争しない？」

とか言って発情しながら山越を絶妙の手加減で半殺しにして行く恋
姫孫策を想像してしまった。
超怖い。

劉表の統治している時はろくに出てこないのになぜか荊州を孫家が
治めるといきなり現れて襲ってくるんで、この人たちの扱いが困る。

解説：崔州平、徐庶、劉巴、孟建、向朗、尹默、李言選、石韜はは
わわ軍師とあわわ軍師といっしょに水鏡先生の所で教えを受けたメ
ンバー。だったような

解説：明帝の大治水工事は数十万人を動員し黄河に長大な堤防を築
くとともに、黄河を何カ所かで分流させてその勢いを削ぐというも
ので800年もの繁栄を約束した。黄河からの灌漑が始まったのは
漢の時代。

解説：孫呉の世兵制は世兵は武人個々が私有する、世襲の私兵部隊
で世兵を養う為に奉邑と呼ばれる領地を与えられている。これは君
主の直属ではなく武将達の私有物であり武将を介在した間接支配。
その脆弱性を補うものは君主と武将達との個人的繋がりの強化。す
なわち忠誠心を繋ぎ止めて置く為の恩賞を与える事であり、戦い自
体には勝っても江夏取れないという状態である物がなかったので
山越を狩って報酬とし、曹操と同じ奉爵制になってからは山越狩り

は人員・兵員を確保のついでに経験を積みさせることもできるおいしい事になった。という認識です。

第18話 美祿（前書き）

お気に入り1000突破！ありがとうございます。

第18話 美祿

南方での屯田は金がかかる。南方は梅雨があるため湿潤気候で米主穀農業であるので北でやるのでは大きくやり方が違ってくる。

水田稲作は集団主義農村を生み出す。それは用水の問題があるからだ。同一用水の使用農家が一単位となっていて自分たちの用水は他人に絶対に使わせない。用水使用の規則で単位集団の仕組みが決まるので閉鎖的な集落が形成される。他の村の流入を認めると田圃不足、水不足を招くからである。

これは乾燥気候で粟雑穀農業で雨水で足りる粟、麦などを作る北方にはない悩みだ。どっかの村に突っ込んでとかはできないので開拓するしかない。そして米と粟ではコストが違う。耕せばいい粟と違い、米は用水の面倒まで見なくてはならない為お金がかかる。

稲を作るなら陸稲と言う手もあるが陸稲より水稻のほうがいい。そう思うのも中国は夏が雨季なのだ。雑草が育つ夏に畑には穀物の苗が育っている。そこで一本一本傷つけないように慎重に毎日のように雑草と格闘。土が固まりになるとハンマーみたいなもので固まりを叩いて地下から続いている毛細管を切断し、地下水の上昇を食い止める作業をする。休む暇もないし、そこに大規模の治水事業を強制したら批判爆発で詰みそう。乾田か湿田かで2毛作できるかが決まるし、開拓する候補もいくつか回らないといけないから稲については保留かな。他のは牛でも貸し出そう。ハンマーでたたくなると疲れるだろうし…

治水の技術も屯田を使って蓄積していけば大規模なものもできるといいなあ

それよりも…

「あーあ、金どうしよう。金ねえ〜。」

内政チートスゲーとかやろうとしたけど、ぶっちゃけ重税うんぬんよりもともありえないほどの重労働と労働時間だからな。雨季がずれてるだけでこんなに違うのか？って感じだよ。中国産がなんであんなに農薬使いまつくてるのか分かった気がする。いや、今知ってもしょうがないんだが…
牛どれだけ買えばいいんだよ。

「何言ってるんですか？何のために苦労していままで麦酒の販路を開拓してたと思ってるんですか？」

なんですと？

「前漢の酒専売収入は年間16憶銭。これは保存が全く効かない従来のお酒でもこれだけ儲けられました。販路さえ築けば麦酒はそれ以上の収益が期待されます。酒を作るのならば長沙の？湖でしょう。だから荊州の名門であり江夏派閥であった黄祖さんを長沙で麦酒の製造に、荊州の名門で長沙派閥の蘭さんを南郡で水上航路で運ぶ役を一任にして莫大な利益が出ると予想される麦酒の利権の一部を残った豪族に与える為に各郡に配置したのではないですか？」

菅蒲様が「えっ何も考えてないのに置いたの？」的な目で見てる。ぶっちゃけ蔡瑁といえど水軍、黄祖は守城の達人だから交州の最前線任せようくらいしか考えてなかった。

「……も、もちろんじゃないか。俺が言っていたのは俺の給料のこ

とだよ。」

とりあえずごまかそう。

「給料ですか。州牧は給料がありませんからね。」

「皇帝が人件費ケチって…」

そのあともなんだかんだ皇帝の文句言っでごまかした。

そう言えば鉄の専売の倍は儲かってたんだっけ。

？湖の水で作った？酒は西晋の皇室の貢ぎ物として好まれたものだったような。しかも砂糖あるし…あれ、ここって酒作るのに最適な場所なのかもしれん。

漢代は天の美禄とか言われて飲兵衛を自慢する時代だもんな。飲む量が20リットルとかありえねえだろ。

強制じゃないから今まで逃げてきたけど、ここの酒ただの濁り汁みたいなものだし濃度上げた酒はおいしだろうしなあ。儲かるだろう。

なんだか屯田とかさういう未来の政策より酒の作りかたの方が役に立ってなんか複雑だ。

でも酒は造る人増やしすぎないとしないとな。

イギリス救貧法を例に挙げて考えてみる。この救貧法は簡単にいえば失業者への社会保障と仕事の斡旋を強制的に行うというもので見るといい法律に見える。しかし、労働者が救済を受けて、家族を養えるようになったとしても社会全体での食糧生産を増加させなかった場合は、他の人のわけまえを減らすことと同義。生存手段と人口のバランスを破壊し、過剰人口による全体の困窮を引き起こす。マルクスは救貧法に対して「こんな法律やめて、食糧作るの推奨した方がよくね。」的なことをいつている。

酒はあくまで資金を得る手段だ。金持ちが貯めこんでる銅銭を酒を使って市場に流してデフレを…ちよつとでもなんとかして税負担を軽減させる。集めたお金を使って棄民に食糧作りを斡旋すれば大丈夫なはず…あゝ経済学者とかいねえかなあ。ぶつちやけ元大学生の知識じゃよくわからん。この時代の経済学とかどこの収穫量が多いだの、道がどうのこうのとかそついうのだもん。

第18話 美祿（後書き）

中国の農業は強制的にやらせないとならないほど大変。なんだよ再生アルカリ化現象とか。さらに黄土が肥沃じゃないだと…農業チートは奥が深すぎる。

でもこの考えだと南部の小作人が移る必要ないんじゃないかと思いはじめた。耕せる広さが限られてるのなら一人あたりの収入が減らないように追い出された次男や三男を吸収する事はできるかもしれないけど税が安い程度で閉鎖的な集落に住んでる人が出てくるとは思えない。

北の屯田を基準にしたから矛盾が…修正するかもなんてこった肥料チートが古代中国では使えない！

この時代、泥を肥料分として利用しているらしいです。それが河に流れ込んで濁って黄河になったらしいです。

第19話 儒学（前書き）

孫呉ってどうすりゃいいんだ!!!

孫策達の言う呉の王はだれが認めた者なんだろう？自称？

漢王朝が劉姓以外を王にするとも認めるとも思えませんし…

勝手に王を名乗っているのかな？

外史だからしょうがないよ。と言われればそうなんですけどね。

第19話 儒学

「やばい。本当に人手が足りない。」

移民の受け入れ態勢どうしよう？

河北で水稲作が行われていないわけじゃないんだけどなあ。水稲田にすれば再生アルカリ化現象は発生しないため、むしろ推奨してたし。でも畑作は泥を引き込んで肥料分とする方法が取られ、その泥が黄河に流れ込んだ。そして元来水稲作が可能なほど清水であった河も濁ってしまい水稲田には向かなくなってしまった。誰だよこれ考えたの！

同じ農民でも水稲田のやり方なんて河北の農民はほとんど知らない。

そこで太学から取ってきた者に代田制など過去の農業法などを教えたりして農都尉か水稲作使者にしようと考えたのだが合わないのが多すぎた。

もちろん優秀なので政務とかはできる。しかし、儒学的思考のものが多すぎてどうにもうまくいかないし…

現実家 収穫量増える なにか秘密があるのでは？

儒学者 収穫量増える 徳が高い人

こんな感じ…

大学生は儒教官僚の卵だと言う事を忘れていた。

「どっかに儒教とかじゃなくて現実的な考え持った人いねえかな。1州の範囲だと俺が見て回るわけじゃないし……」

こんな考えでよく太学卒業できたな。と突っ込みが入りそうだ。補足しておくとお劉表は孔子の家を邪魔だからぶっ壊そうとして壁の中から『礼』の逸文39篇、『書経』16篇を見つけて孔子の研究を大幅に前進させた人の子孫なので孔子研究の分野では超名門といえる家の子だ。

先祖が残した考察の本なんかもたくさんある。それを全部丸覚えしたので成績はいつも良かったし、学者としての名声もあつたが結局、丸覚えしただけで共感なんてまるでしてなかった。

それに、劉表の政治は全くと言っていいほど儒学的考えに合っていない。

儒学者からしてみれば劉表の政治はめちゃくちゃである。庶民を最優先とする光武帝が士大夫に嫌われた理由と一緒にのだが、「礼は庶民に及ばず、刑は士人に及ばず」という儒教の考えから離れているのだ。なんで自分たちが失策や不正したくらいで罰を受けなきゃならないんだ。と儒教の考え的に彼らはそう思う。

章帝の宰相が光武帝を貶していることが現代に伝わっていることから彼の政治のやり方がどれだけ士大夫に嫌われているか分かるだろう。

劉表の統治は表向きは儒教的な徳を重視する国家像ではあっても運

嘗には法家の法治主義のような感じになっている。それなので儒教官僚の方々の評判はすこぶる悪い。裏で「刑罰の根本が正しくなく、秦の酷政、王莽の苛政に匹敵する」とか言われていた。

はつきり言つて劉表もそこまで厳しくするつもりはなかったが、各郡の太守もしくは丞が正史で三国時代の最初に制定された本格的な法律を作った人や厳格な法の適用したとか言われる法律のプロ、超真面目人間ばかりなので各郡が法律を犯した者に厳しかった。

しかし、儒学の災異説の考えでは徳の高い人物が治めれば災害が起きない。という考えなので劉表は徳が高いから任地が豊かになるんだ。と考える学生がいるので評価が高く、天下の名士番付の八俊、八顧、八廚に入っていた。

劉表が治めている所や自分の領地は豊かになっている。しかし、治めているところが豊かになったのも植える間隔や作業効率がいい方法を教えたり、農具の貸し出しによってアルカリ化現象で塩類の集積が起こるのを防いだり、アルカリ化現象によってダメになった土地を周の代田制を使い再び作物を取れるようにして、自分の領地はアルカリ化現象で作物の取れなくなった土地を買い叩き、代田制を続けた上で肥料づくりをやって10年程経つてようやく成果が出てきて豊かになっただけである。別に劉表が家を継いだとたん豊かになっただけではないし、徳なんかで収穫量が上がったのではない。

そして治安が良くなったり、生活がよくなったりしたのも農具の貸し出し、とくに脱穀機の貸し出しによるものである。この時代の脱穀の作業は辛く、洛陽では女性の犯罪者に罰として役人の給料である粟の脱穀をさせている。これはあまりにつらい仕事なので強制してやらせても文句を言われなさそうな人物である犯罪者にやらせようというものである。それほどまでに辛い作業だ。これがなくなれ

ば、大幅に時間ができ、空いた時間に副業を行ったりして生活に余裕ができる。ある程度生活が豊かになれば犯罪率も減るのである。もちろんこれも徳によるものではない。

だが、基本的に徳が高い奴が治めればなんとかなるという風な考えなので、徳が高いのだからそんなことしなくていいんじゃないの？という意見につながるのだ。

そういう風に教えられているのだからやりづらい。しょうがないので儒学の考えにとらわれない人材を育てるために学校を作る事にした。

「居ないならそだてればいいや。」と単純である。

「と、いうことで教師役お願いします。」

と劉表はどれだけ必要としているかを話し、目の前の青髪の女性に頭を下げていた。

「お断りさせていただきます。」

そして断られていた。

第19話 儒学（後書き）

後書き 荊州での教育者と言ったらあの人。

基本的に主人公は実際に見なければ名君っぽいですが、実際に会ってしまつとこんなもんか。と思われてしまふ。皇族という要素くっ付けても魅力70くらいな感じなイメージ。一般人としてはそこそこだが君主としては魅力が足りないと言う感じ。
目を見た瞬間に主君と認められるなんてありえない。

第20話 学派（前書き）

理想郷の紹介を見て、主人公は不幸の方がいいのかな？と思いき超ハ
ードルを上げました。こんな感じに環境を三国志の環境に近づけて
行ったら恋姫キャラが生き残れるのか心配ですが（特に劉備がやば
い）…まあ何とかなるでしょう。

第20話 学派

豪族というのはなにかと言えばもともとは父老だ。なかには土着した高い経済力を持った商人がその高い経済力を背景にこの父老となる者もいた、しかし本来、父老とは里の中で徳が高いと言う事で選ばれた者で、いふなれば善意の指導者であった。その力は強大であり、父老が治安維持や裁判を行っていた。

時代が経つにつれてその力を利用して奴隷や仮作人を使い、経済力を強化する者が出始めた。そのものはそうして強化した経済力でゴロツキを雇い、農地を奪って行った。そうして奪われた農民は里から離れた耕作に適さない土地を開墾し、細々と暮らすか、小作人となって生きていくかしかなくなる。これに対して前漢や後漢初期はそんな土地に酷吏と呼ばれる法を犯した者を厳しく処罰する者を派遣し、抑止力としていた。

しかし、郷拳里選を利用し、豪族の力はどんどん増していき人材任用は豪族の影響力が強く、そして豪族の力を借りずに職務を行う事が出来なくなっていた。もちろんだが全ての豪族が奪っているわけではない。自ら開墾し、洪水や塩類の集積によって土地を失ったり、重税に苦しんだ人を住まわせる者もいるし、学問所を開いて字を教える者もいる。

しかし、上田と呼ばれる従来の二倍の収穫の田を作るには莫大なお金と技術が必要だ。それを作る為に多くの金銭を使い開拓するより奪ってしまった方が早いと考えるものが多いのもまた事実。そしてその力が里を超えまた新しい里へ勢力を拡大していった。

その豪族達が重税に苦しみ去っていく流民を防ぐための権力を求めるようになり、漢王朝もそれに対応するために地元には任用しないという対策を取るが失敗した。

この世の春状態で酷吏のいない状態を謳歌し、勢力を伸ばしてきた豪族同士が人や土地を求めて対立する事は想像しやすい。春秋時代もこうやって対立して乱世となったのだから…

そこに州牧として着任したのが劉表だ。劉表は荊州の動乱時に五十名以上の豪族を統帥権を犯したとして殺害、荊州の軍閥を解体し、その豪族の私兵である部曲を自分の部曲に吸収した。その後、強大な軍事力を背景に酷吏を使い、法を破った豪族を処断し、地方豪族勢力の力は大きく削がれた。

そして利益無視の屯田政策により、小作人が流失した。税が安すぎるのだ。長期間働かせないと開墾にかかった費用と釣り合わないような政策を麦酒による利益を使つてする。これはもういやがらせの様なもので税を引き下げなければ土地から小作人が離れて行つてしまふ。

そして、このまま抑圧を続けるかと思えば麦酒の販売に残った豪族を使うという譲歩を見せた。塩の専売並に儲かる可能性のあるものの利権の一部を与えることよつて官職を私物化しなければ”そこそこ”おいしい思いができる事を示した。これを最終通告と判断した豪族間で妥協派、強硬派、対話派などの派閥が生まれ分裂した。

これは資本家として欲しかったという点と、豪族同士のつながりによつて販路開拓を行つて欲しいと言つ意図もあつたりする。

そうして出来たのは君主権の非常に強い体制であり、豪族が交代でやっていたり、売官によつて付いたものがやっていた県令や太守の立場にはやや豪族に妥協したものだ。がほとんど劉表自身が面接をして取り立てていた者を付けていた。

この恋姫という世界は三国志をベースにしていて、そして三国志に出てくるような人物の才能は他の者の才をはるかに凌駕する。武官に至つては一騎当千を当たり前にするのだ。しかし、文官はある程

度の地位を与えなければその才覚などわからない。しかし、高官につてのないものはその機会を与えられないのだ。そして有名になつた文官は取り立ててくれたものに恩を返さねばならないのでスカウトしても無駄なのである。だから名士鑑定士や優秀な名士を抱えている豪族などの力を借りざるを得ない。

しかし劉表は自身の名声と現代知識という反則的なものを使って辟召した官僚は今現在うまく機能しているので名士鑑定士や豪族の一番がほとんどない。自分が紹介してやったという事を利用して、紹介した名士を使い政治に口をはさむということができない。

そして名士は協力する事を控えている。名士優遇の政策ではないので協力してやっているといるという立場に立てない。名士は部下でなく協力者の立場に在りたいのだ。

例を言えば劉備の三顧の礼。これは劉玄德が諸葛孔明を軍師に迎える際、丸一日かかる距離を三度も往復して熱意を伝え、それに諸葛孔明が答えたというものである。

これが現実にはどう言った意味をもつたか？

劉備はそれまで名士の意見を無視して関羽や張飛の意見ばかり聞いていたので名士は劉備の下から去っていった。なぜ劉備が劉表に身を寄せたのかといえ、政務のできる名士が居ない為に拠点得る事が出来なかつたからだ。

この三顧の礼は名士である孔明に礼を尽くしたということで劉備はこれからは今までのように関羽や張飛の意見を優先せず、名士の意見を優先させるということを示したのがこの三顧の礼なのだ。

名士の力を借りずとも一流の官僚機構を形成できる劉表が自ら出向いて登用を迫るといふのは崩越と崩良、蔡瑁以来、しかし協力者としての立場と地位を得たその三人でさえ、劉表の持っている家柄、

経済力、軍事力、権力には遠く及ばない。そして劉表のこだわりがなければ十分に荊州を運営できるほどの人材がそろっている時期のこの対面は劉表と名士との関係を決める。重要な会談となってしまう。名士というのは基盤と呼ぶべきものは名声のみ、この後、貴族となり、自質、皇帝より強い権力を得る存在となるとは思えないほど現在の基盤は弱い。

ここで簡単に従うと言ってしまうえば名士の価値は下がり、ただの優秀な官僚で終わってしまう。そうなれば、名士社会からの彼女の評判は大暴落してしまう。とりあえず断っておいて、また来ないように祈りながら姉と慕う？徳に相談しようとしていた。

「あ〜ん、どうしてこんな事になっちゃたんだろう。」

彼女の名は司馬徽。水鏡先生といえば聞きおぼえがあるだろうか。

彼女は別に党固を喰らったわけでもなくただ宦官と士大夫との争いから逃れて来ただけである。名士としてもそこそそ有名だったが官職について上を目指したかったわけでもなくただ子供に勉強を教えるのんびりと暮したかっただけである。

それがいきなり重役に就いて欲しいとか言われて、名士の代表にされても困るだろう。

「落ち着きなさい。」

司馬徽が姉と慕う？徳が言うが

「どうしよ〜どうしよ〜。」

と、まったく話を聞かない司馬徽を殴っていた。

「痛いよお。」

涙目になっている司馬徽を無視して話し始めた。

「いい、あなたがどちらを選ぶかはともかく、三顧の礼は尽くさせなさい。今は党錮の禁で不安定な状態なのだから名士の価値を下げ、事をすれば嫌がらせを受ける事になる。」

「う、うん。わかってる。」

「…で、どういう地位について欲しいと来たの？」

「え〜と、公羊学派の緯書でなく原本である経書で学ぶようにしたいらしくて、でも自分は荊州の統治が忙しいから学派の指導者としての地位について欲しいということかな？」

「…やめておきなさい。」

「え、なんで？」

「劉荊州牧の統治はとても現実的で厳格。儒学的な要素は入っていない。でもこの国で官僚になる為には儒学を習わなければならない。しかし、その儒学も自分たちの都合のよいようにこの四〇〇年で変わってしまった。前漢の崩壊も儒学の暴走によるものだからそういう解釈ではなく原本の考えに戻したいという気持ちは分かるけれど時期が悪いわ。今、皇帝と太学派の争いは知っているでしょう？」

「う、うん。」

「彼らの考えは儒学を治めた徳の高い自分達がそれにふさわしい地位に就けば漢は素晴らしい国に戻ると言う考えだから、あくまでも人としての道筋を示すに過ぎない原本の考えは否定される。もし、

太学派の勝利で終わる事になったらその派閥の指導者であるあなたは公羊学派と対立する事になるわよ。もちろん、皇帝が勝つ確率が高いし、そうなれば太学は力を失い。個人での人脈での出世、もしくは皇帝の学校に通うかしかなくなる。そうなれば人脈のないものを取り込んで荊州で一大派閥を築きあげることもできるかもしれないけど…」

「…それって、生徒さん達を利用してっってこと？」

「ええ、だからあなたにはできないでしょう？」

「うん、じゃあ断ってくるね。」

という感じで礼を尽くすも断られてしまった劉表。

とは言ったものの優秀なものであれば名士を優遇するという態度を示す事には成功したと言っていい。

そして…

「お姉ちゃんっいたらひどいんですよ」

「こつちもね。一応、部下のはずなんだけど俺より態度が大きいと思うんだ。」

と、登用に失敗するも、愚痴を言い合う友人になっていた

第20話 学派（後書き）

ということでも水鏡先生を得る事はできませんでした。

名士としての立場というより教育者としての信念を持ち、政治に利用しないことを優先という感じです。この小説では白い水鏡先生となっておりませぬ。

納得していただける…かなあ？

正史の劉表は実践的な儒学を研究する荊州学派を作り上げました。

しかし、乱世になっていない状態で儒学を学ばせる太学がまだ力を持つている状態だったのでそんな人材を育てる機関を作れないです。

劉表さんはまじでチートです。

恋姫で誰か言っていました。武人は一騎当千とか普通にするので戦わせて見ればわかりますが仕事をやらせないと文官の能力は分からないでしょう。有能な文官を知っている劉表は青田買いしまくります。

能力があり、忠誠心もそこそこある部下を持っていて、民にはいい政治でも、民重視の政策は豪族に嫌われます。

このまま皆殺しはしないけど弾圧し続けたら孫策のように暗殺されるなあ。と思いい利害調節しました。

そしてもちろん地元有力者の支援なんて貰えません。だって弾圧してるんだもん。

劉表政権は麦酒頼み

読んでいる本が豪族アンチっぽい本なので影響受けてなんか全部豪族が悪い事に…いや、違うよ。皇帝とか宦官も悪いよ。あれ、全部悪人になってる。

善政して平和になったENDが…どんどんハードルが上がっていま

す
ね。

第21話 経済（前書き）

1カ月ぶりの更新。調べてみたら正史の方やばいですね

長沙蛮が叛き、益陽占拠。

武陵蛮が、江陵占拠。

天竺の使者が南陽・襄城・昆陽で扇動し叛乱。

長沙郡、零陵郡で賊が立ち、桂陽郡・蒼梧郡、南海郡、交趾郡侵略。

ガイ県の賊が、長沙の郡県を襲って焼き、益陽占拠。

零陵蛮も叛き、長沙侵略。

長沙郡で賊が立ち、桂陽郡と蒼梧郡を侵略

武陵蛮が江陵侵略。

桂陽の盜賊が、境界を侵し、武陵蛮が叛乱。

コ県に隕石が落ちてくる。

桂陽郡で、胡蘭と朱蓋が離反し、郡県を攻め落とし零陵郡侵略。

と、荊州だけでもこれであるとか：桓帝は災害を受けたり、賊に襲われた地域の者に食料や見舞い金として銭を与えたり、税金をなしにしたりと福祉に金を使っでいて、冷害対策として芋の栽培の推奨や食料確保の為に禁酒令を布くなど民の為に働き、名誉職を削り、皇甫嵩の伯父の皇甫規をなど優秀な将が居て鎮圧出来ていたのでなんとかなっていたけど、ここで滅んでいてもしょうがないような：さらに天竺からの使者を名乗る者やローマ国王のマルクス・アウレリウス・アントニヌスなんかも出てくる中で役に立たなかった官僚は給料を減らされたり、服の支給や酒を飲むのを禁止された事に怒り皇帝の墓を放火活動。

桓帝は10代で重度の心身症を発病しながら激務を乗り切ったが、落ち着いてきたら日和見豪族達は「領地切り取り放題だぜ」と奪

い合い再開。

桓帝は災害を自分のせいだと言われ続け精神を病んで道教にはまり皇子産む事もなく死亡。

リアルにしすぎると寿命20年の時代に霸道やら孫呉復興やら言ってる曹操や孫策がどうしてもちっぽけな人間になってしまいそうなので…。民の為とか言う劉備も呉ルートで水計してますがあれは普通に河川付近の田畑をダメにするだけじゃなくチフスが流行り、何十万という人が餓死か病気で死んでしまふと思います。この時代で洪水が起こるとやたらと人が死ぬのもそのせいですし、生活基盤を奪われればほとんどの人は死ぬしかありません。新滅亡の原因である赤眉は土地を失った人が起こしたものだ。そんな状態にしておきながら益州行けばいいやという考えなら…

リアルすぎると恋姫キャラみんなダメ人間になってしまふのでちょろっとぬるくしまーす

第21話 経済

劉表の政治は自分の先祖である景帝のように異民族に対しては消極的な外交政策に努めて軍事費を減らし、重農政策を打ち出し、効率の良い方法を教えることで収穫量を増やした。

三国志で三国鼎立に入った時に蜀の孔明は南征を行い、呉の孫権は外国へ行き異民族狩り、魏は内政を行った。その結果孔明は南征で平定した土地から北伐にかかる費用を捻出する為に搾取し一時的には国庫が潤ったが15年以上に渡る南部の反乱を引き起こした。孫権は日本や朝鮮半島に行き人狩りを行おうとしたが感染症や船の事故で人口は少し増えたが精兵を失った。と言う風に平和な時代に人口を増やそうと異民族に手を出した二国は国力を下げている。魏は人口を1500万ほどまで増やしたとされる時期に…

それに対し正史の劉表は異民族討伐は勝利した上で交渉に入り優位な状態で講和し、最終的には官渡時の曹操以上の人口と国力を荊州のみで実現している。

異民族は強い為ビビったというのが劉表の本音だが講和はベストとはいえないがベターな方針といえる。

収穫量の増やし方は水稻作以外では区田法というやり方で増やしていた。農民に負担が小さく、高い収穫が得られるやり方であり良田が1畝で4石なのに対して16石の収穫が出来ると言うものである。飢饉に備える意味と棄民が無料で食べられる食事処用に芋などの冷害に強く育てやすいものを州で買い取った。

そして水稻作では寒冷化によって収穫量が大幅に減ってしまっていたので湛水灌漑を行い地温を調節することを可能にする事と生産活動の組織化を主に行っていた。

農業においては小農家より大農家による分業体制の方が効率がよく、飢饉や凶作にも強いし、役人が重税を勝手に取るようになったら村人全員が協力して対抗するであろうから不正が起きればすぐ発覚する。

しかし、これは農民個々にまで及ぶ一元的支配を理想としてきた中国の王朝の正反対を行く行為である。その集団が反乱を行った時、団結力がある鎮圧しづらい面倒な集団が出来あがってしまうという怖さが存在するのだ。日本を見れば分かりやすいが水稻作は集団主義を産みやすい。

問題だったのが開発の問題。新田の開発と水利灌漑施設の設置は表裏一体であり、現在国家が農民を慰撫する為に作った水利灌漑施設の多くは豪族の手に渡っている為、庶民が恩恵に肖る事などない為、稲作を行う為には新しく作るしかないのが現状であった。

豪族の力が強い山陽郡や汝南郡などでは全滅している事などと比べれば南陽辺りは皇族系の優秀なものが付く事が多いので半壊程度で済んでいて劉表が来てから新参豪族が土地を持っていても法が厳しく、あまりおいしくない荊州の土地を売って隣の揚州に投資先を変えたりしているのである程度マシなのだが

赤壁の戦いを見て分かるように住血吸虫やチフスにやられて死にやすい北来の民は南陽と南郡、江夏の北部以外で作業させるわけにはいかずに三郡に移民させていたのだが移民者が増えすぎた為、灌漑をおこなう事を早急に行わなければならなくなった。

そこで休耕期に合わせ「参加してくれれば人头税いらぬよ。」と言って治水事業に参加させて、デフレによって税が払えずに去っていく人が居ないようする政策と合わせて大規模な灌漑事業を行っていった。

麦酒や米酒は酒池肉林がコモンセンスな金持ちを中心に流行り、莫

大な利益を上げていた。材料は麦や米であり、加糖すると言っても砂糖は米から作られる為、価格と原材料費の差は桁が違っていて荊州全員分の人頭税を軽く負担する事が出来るほどの利潤が得られている。

地方税は収入の一分。州牧と言っても地方役人である劉表が好きにできるのはその一分だけ、人頭税が把握人口より少なくなれば劉表は解任されたか横領したとされる。しかし一分だけでは足りない為、自腹を切つてやる事状態になっていた。その甲斐があつてか名士番付で八廚のトップになっていた。

ここで民が漢は増税なんてしていないのに後期では税が払えなくなつてしまつたのかというと、ただ収穫量が減つたり、悪代官のせいというだけでなく経済の問題が存在する

後漢後期ではデフレが進み、光武帝の時が一石が百銭だったのに対して黄巾前の後漢の豊作時はたつたの三銭程度。

農家が持っている農地が百畝。収穫量が一畝二石。と計算する。光武帝時2万銭の収入だった家庭が六百銭の収入となり一般的な家庭の五人計算だと一人当たり百二十銭。人頭税百二十銭だけで終了。手元には何も残らないようになってしまった。税率は変わらなくとも数十倍の増税と同じになる。もちろんこれは豊作の時なので通常はもっとマシな状態ではあるのだが豪族の小作人となるのと漢の民でいるのも同じような状態になった。

貨幣を作ればいい。と思う方も多いと思うが士大夫が大反対する。名士＝豪族でないように士大夫＝豪族ではない。しかし、光武帝の時代の子供は皆学校に通うような時代が終焉を迎え後漢後期では国の役人の七割が豪族出身者で構成されるようになっていた。

豪族は貨幣寡占で小農民を支配しているのでそれを邪魔しようと思

う者は居ないし、しようとしたら殺されてしまうし、作るのが難しい事で有名な五銖銭を作る事が出来るような職人を士大夫は迫害している。

正史でその迫害によって起こったのは董卓銭による漢の貨幣経済の崩壊。五銖銭は銅：錫：鉛の比率が74：25：1だったが作り方が載っている「考工記」には鉛についての部分の表記が存在しない。職人はだれもが知っている知識だったが、そんな事知らない董卓は「考工記」の通りに作ったので、鉄クズになってしまふ。そして何度試してもうまくいかないので逆ギレして董卓銭（と言う名前鉄クズ）を発行した。

豪族はそれを憎んだらう。しかし多くの庶民はそれを喜んだらう。人頭税が自質消滅したのだから、もしかしたら董卓に感謝したのかも知れない。

経済の発達していない古代中国は蓄積できるものが少なく、穀物や絹の蓄積には限度があり、搾取は無意味であり、国の搾取から小農民を守る豪族という形であった。しかし貨幣経済の発達により蓄積できる銅銭の存在が小市民から搾取し、その銅貨を貯め込む豪族を生んだ。

貨幣を改鑄しようにも金や銀はシルクロード貿易に流れ、銭貨を作れる職人は少なく、しようを試みた事がばれば殺される。

秦は貨幣の統一を図ったが広まらず、前漢は市場規模の割に貨幣が少なすぎてデフレ、新は多くの種類の貨幣を発行した為経済の混乱とインフレを引き起こし、後漢は豪族の貨幣の寡占によりデフレとこれらの経済政策の失敗は国の滅亡の一因となっている。

もちろんこの時代に銀行なんてない。預金を貸し出し、その貸出金が再び預金されてもとの預金の数倍もの預金通貨を創造！なんて事もできない。劉表の知識は碌に役に立たなかった。

そんな中で劉表は

「鉄隕石を使つて貨幣改鑄でもするか？隕石から取るから天の硬貨とか言えば…なんかうまくいきそうじゃないか？とりあえず職人とか今から保護しておこうかな。」

とか民衆の信仰を利用してしようとしていた。

鉄隕石は天からもたらされた物質であることが知られると、宗教な意味づけが加わり珍重されたものである。もちろん現代では隕石としての博物学的な価値があるのみ。いっぱいあるのである

荊州に数年前隕石が落ちてきたのでこれは天からの贈り物だ。とか言うつもりだ。

この人の思いつきはあいかわらず面白いと思う。

うまくいけばある程度経済が安定するかもしれない。

でも、国に勝手に貨幣鑄造なんてしたら篡奪か独立しますよと言っているようなもの。

長い間一緒に居るがこの人は自分がどういった立場なのかいつまで経つても理解しようとしれない。

それがなければ安心できるのに…

と心の中で呟きながら魯肅は劉表にそういった意思があるのか問いかける

「新たに国でも建ててるつもりですか？」

「そんなわけないじゃん。王とか州牧とか疲れる仕事は能力とやる

「気がある奴がやればいいよ。俺は給料は少なくても時間が出る仕事に就きたい」

と言う風に劉表は国を奪おうなんて考えなんて全くなく、任されたからには出来る限りやるうという責任感？と鎮南將軍が動かす地域は黄巾は二百万、三百万とかいう状態だったと知識で知っているので安全地帯作らなきゃという思いからやっているものでそういった人間が居れば速攻で逃げる気満々だった。

「今更、なれると御思いで？」

「なれる…わけないよなあ。くそ、曹操の奴宦官の縁者に対して刑罰だ！とか言つてぶっ殺しやがって、推薦した奴つて事で命狙われたし、もう絶対に洛陽になんか行かない。ここに引き籠つてやる。」

現在洛陽の治安が悪くなり、宛の治安が良くなり灌漑事業と川賊狩りにより水道運送が発達し商人は宛を本拠地にしたものが増え始め、増加した収穫量と移民受け入れによって洛陽に匹敵する都市になっっている。これによってさまざまな者が荊州を欲しがり始めた。今回行った灌漑事業も軍事的に見れば？水南北において運河を開拓して人を移して開墾し、数万の軍隊とその食料を現地で調達するようにして楚の長城を盾に独立しようとしていると見ることが出来る。もちろんそんな事はなく北来の移民は長江の住血吸虫に免疫がない為南陽以外では感染してしまう。役人は汚染された水に直接触れないなど気を付ければかからないらしいが農業をする人は水に直接触れることを避けられない。おそらく感染してしまうだろうと移民の開拓は南陽と南郡の北部に限定した為だ。張仲景殿が治療法は確立させたとはいえ全ての者に治療はできないのが現状だからしょう

がない。

軍事的な面で見れない宦官より今は士大夫との関係を深めるのが重要。

皇帝にそう言った事を進言されれば気が変わり謀反人扱いとされる可能性がないわけではない。

曹操という陽様が推薦したと言う女の子が宦官の縁者を殺害した事はむしろ良い方に働いている。

敵の敵は味方。宦官を倒すまでは利用価値があると思って下手には出さないだろう。いやそついった状況にする。

と、決心するも表には出さずいつものように仕事を渡す。

「では、今日の仕事ですよ。」

「え、なんでこんなに多いの？」

「原価主義から時価主義に変えてくれなければ分からないとかそういった事言うからじゃないですか？」

「いや、経済がこんな状態で買った時の値段なんか報告されてもしょうがないから……さ。」

「でも下の方も仕事が増えたと言ってますよ。」

「……………不幸だ……！」

劉表の叫び声が響いた。

第21話 経済（後書き）

作者的主人公能力値

劉表

爵位：成武侯（従二品）

地位：荊州牧、鎮南將軍

統率：90 武力：51 知力：72 政治：100 魅力：75

槍兵：C 弓兵：A 騎兵：A 兵器：SS 水軍：D

野望：E 漢室忠誠：E 義理：A

スキル：農法（支配地域の収穫量が2〜8倍アップ。）

八俊（英才を持った名士八人の一人。文官登用率20%アップ）

八雇（徳で人々を導く名士八人の一人。文官登用率20%アップ）

八廚（私財で人々を救う名士八人の一人。文官登用率10%アップ）

麦酒（年間20億銭以上の特別収入）
知識（優秀な武将や文官を知る事が出来る）

皇族（皇族系の名門。高平県劉氏。権威30アップ）

十万を瞬殺というのはこの時代は戦果を十倍に報告するのが普通だからです！

有名な赤壁百万も実際は八万位らしいですよ

修正中！変な所が残っていますがちょっとお待ちをm() () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0833r/>

真・恋姫†無双～劉表伝～

2011年8月6日18時01分発行